
ウレハ

いみたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウレハ

【Nコード】

N7681Z

【作者名】

いみたん

【あらすじ】

クリスマスの夜、真紀は逃げるように地元へと帰郷する。母校の回りを歩いていると、女子中学生にライブのチケットを押し売りされ、しぶしぶと公民館へと入った。

羽柴良太は、親友であるひきこもりな橋本恭介を連れ出すべく、荒療治としてライブへと出かけた。

隆は松尾淳一の紹介でバンドのヘルプを頼まれヴォーカルとしてス

ステージに立った。

ベースの男は遅れている、バンドのヴォーカルが到着するまでの間、時間稼ぎに流行曲をのコピーをしようと隆にもちかけるが、隆はこれに断固として反対した。

そのとき、会場に居合わせた、真紀を指差し、

「あんたにこの曲を捧げる、メリークリスマス！」
と、言った。

隆のこの行いにベースの男は更に怒りをつのらせ、襟首をつかんだ。騒然とする中、このバンドのメンバーである、山中椿は、場の空気を収めるために、ギターをかき鳴らした。

頃合いを見て、隆は歌い出した。

歌唱力の高い隆の歌声に場内は唖然とする。

居合わせた者は隆にだれも文句を言えなくなった。

隆が会場から出て、バイクのエンジンをかけていると、隆の後を追ってきた真紀が話しかける。

オリジナルだという先ほどの、即興に驚く真紀だった。

二人は意気投合し、逃げるように会場を去った。

『第一部』プロローグ（前書き）

この物語は、当初同人ベルゲームで、商用を考えておりましたが、諸事情により、制作を断念いたしました。

イラスト（立ち絵）、物語が半ば出来上がった状態です。

多くの人に楽しんで頂くために、今回公開に踏み切りました。

イラスト（立ち絵）一枚絵などは、アメブロの方で展開していくつもりですので、この作品『ウレハ』をより楽しみたい方はそちらに目を通してください。

<http://ameblo.jp/imitant2/>

『第一部』プロローグ

恋人たちが肩を寄せ合い、色とりどりのネオンが街を包む。

だれもが寂しさとは、無縁でありたいと願う今宵焦燥感を隠した女は、電車に揺られ、都会から田舎へと帰郷していた。

時折ため息をつき、窓辺から流れる景色をぼんやりと眺めて、車内に漂う温かい雰囲気押し払うように沈黙している。

数少ない乗客たち、家族連れや、学生カップルは皆幸せそうな顔をし談笑していた。

その中でぼつりと、取り残されたように女は座っていた。

化粧や服装がパツとしすぎ、右手には山、左手には海と、囲まれているこの田舎では、余りにも不釣り合いに見えた。

全体的には小作りな顔立ちをして、さっぱりとした印象だが、端正な顔立ちである。

「SAYAの新曲聴いた？」

「あれってクリスマスソングだよな」

学生カップルは談笑している。それを見て女は、疎ましそうに顔をゆがめた。

電車がゆっくり駅に止まると女は立ち上がった。

構内は巨人が押しつぶしたように低く、一般的な広さからすれば大分狭かった。

駅には人がまばらだった。

改札を通り、女は外に出ると、

「珍しい。この時期、この町に雪が降り積もるなんて……何があったの？ あ　私が帰ってきたからだ」

と自嘲した。

辺りを見て、目の前にあった空席表示のタクシーに乗り込んだ。
「城西中学校までお願いします」

運転手に声をかけ女は深く腰を据えた。

少年は、扉の入り口に立ち、何かを引っ張っている。

「恭ちゃんてば！ もうライブ始まつてるから、今から行っても、クラスの人にはそんなに会わないよ」

と言つて、さらに細腕に力を込めた。

その小柄な少年は、厚ぼったい前髪で目元は隠れ、頬はそばかすで覆われていた。

「やだよ、良太君、俺」

と言つた声の主は扉の中にいて、ここから先には出まいと、冊子に手をかけている。

中にいる少年の方は体格もふつくらしており、身長もかなり高いので、小柄な少年の努力は、焼け石に水といった具合である。

「良太君の家に行くつて言つたから出てきたのに、俺だまされるところだった」

「だからこうして、打ち明けてるんでしよう」

小柄な少年はそれでも、負けじと引っ張っている。

「とにかく、俺いかない」

「山中さんが参加してるつて言つても？」

体格の良い少年は力を緩めた。その瞬間、小柄な少年の腕はすべり、鉢植えを倒しながら転んだ。背中にある手すりから下を覗いて、

「いったあ」

「ごめん……」

「あぶないよ！ これでもう、行くしかなかったね」

扉の下はおよそ、十メートルの高さがあり、落ちると笑い事ではすまない。

体格の良い少年が小柄な少年に手を貸す。

「大丈夫だよ、僕が保証する。チケットもほら！」

そう言つて、微笑すると、体格の良い少年はあいづちを打った。

壊れかけの街灯が点滅し、夜の校舎をぼんやりと照らしている。
グラウンドの端にはテニスコートがあつて、ネットが張られていた。

女は体を抱くようにして、歩いている。

「懐かしいな、でもむなしい……」

辺りを見渡すと、道路を挟んで、テニスコートから反対の方向にある公民館から明かりがもれていた。

「こんな建物あつたかな？」

と、女は言つて歩き出した。

すると入り口からサンタクロースの姿の少女が出てきて、踊り場から階下を、首を左右に振つて覗いている。

そこで、女を見つけると、

「あの　あの！　その人、ここでライブしてるんですけど、見に来ませんか？」

女は訝しそくに、階段上の踊り場を見つめて、

「その人つて私だよね？」

と、言つて、女はその場所まで歩み寄る。

「そうですよ、今なら特別にただで！」

と言つて、サンタクロースの格好をした、少女は笑つた。

「ちよつと待つてちよつと待つて、うーん、ライブ……ライブか」
女が悩んでいると、

「あの、失礼ですけどどこかで、会つたことありませんか？」

と少女は言つた。

「うまいなあ。久しぶりに、こっちに帰つてきたから、それはないかな」

「わー、どうりでカッコイイ」

「まあ暇だし、いいか……高校生？」

「チュウニです。わーい、それじゃ、中に入つてきてください」

「若いねえ」

と言つて女は階段を上る。中からは何やら騒がしい音が聞こえ、

それが怒鳴り声だとわかると女は、後悔したのだった。

「所詮こんなものか」

少年はそう小声で毒づいて、ステージを見下ろした。
公民館の中は学生でこった返していた。

「えーと何だっけ隆くんだったけ？　ちよっとライブ中にみんなごめんな」

ベースを抱えた男は、観客に一度謝り、少年の肩に手を回した。
男の金髪の頭頂部は黒く、不健康な顔立ちだった。

少年は嫌悪感を隠すこともなく、中性的な顔立ちをゆがめた。

「次の曲それで行くから」

そう言っただけの男は、楽譜をスタンドに置いた。

「俺、この曲知りませんし、楽譜読めません」

少年は一通り目を通して言ってから、ベースの男から視線を外して観客席を見つめ、

「松尾！　これっきりだ！」

と、続けた。

「そんなこと言わずにさ　、学生でこの曲知らない人いないよ。
後半、オリジナルの曲持ってくるんだけど、時間余りそうでさ」

ベースの男は、マイクを避けるように小声で言った。

「だから知らないから、歌えませんか……」

少年はそう言っただけ、意味のないやりとりで嫌気がさしたのか、ステージの右端にぼつねんと立つ、ギターを抱えた少女の方を向いた。
「ねえ、隆君だったよね、聞いてる？」

「松尾君にヘルプ頼んで、君に来てもらったのに使えないよね……」
少年はギターを持つ少女を、睨みつけるように見つめ、少女もそれに答えて驚いたように睨み返してくる。

少女はボブカットに、エースのランプ柄のティシャツを着込み、
チェックのミニスカートに、色落ちしている先がとがった革のブーツを履いている。愛くるしい童顔な顔つきで目尻はつり上がり、身

長は相当低かった。

始まらないライブに、次第に観客たちの話し声が大きくなる。

「わからなくてもいいからさ、適当に合わせてよ。開始早々これじゃ遅れてくるヴォーカルに、申し訳ないでしょ」

少年はベースの男を見上げた。

「適当に歌え？」

少年はそう言って、目の前にあった楽譜スタンドを、勢いよくはねのけた。

「ふざけんなよ！ こっちは、やりたくもねえのに、松尾だから頼まれてやってる。はあ？ はやりの歌のコピーやるくらいなら、バンドなんか組むんじゃねえ、義理で二千元も払えるか！ 五百円の価値もねえ！」

観客席、最前列に立っていた、面長の少年が額に手を置いた。

ベースの男は数秒惚けたしていたが、すぐに険しい顔つきに変わり、少年の襟首をつかんだ。

「テメエ、なにさまのつもりだよ！ ただのすけつとだろ！」
ベースの男はそう怒鳴った。

「それはこっちの台詞だよ。おまえがなにさまかってんだよ！」

二人は押し合い、床にあったコード類が散らばった。

ドラムの神経質そうな男は、ドラムスローンからやっと立ち上がり、喧嘩の仲裁に入った。

「ガキがバンドを知らないくせに」

「おいみんな！ 特にこの男目当てで来てる女子帰れ！ ガキとか高校生に言ってるぞアリエネエ！」

少年はベースの男に殴られステージの端に追いやられる。

そのとき、黒山の人だかりを避けるようにして、ライブなんて眼中にないというように、顔をステージから背けて立つ女に目がとまった。

（こいつも俺と同じか……こうなったら何もかも壊れてしまえ）

少年はマイクを引っつかみ、

「そのギンガムチェックの人！」

公民館の隅にいるその女を指さして、
女は（？）自らを指さした。

「そう、あなた、センスというか雰囲気がいい。あなたにこの曲を
ささげるぜ！ メリークリスマス！」

と、少年は言った。

会場からはブーイングの荒らしが起きた。

「おまえもう帰れよ、クソガキが！」

と、ベースの男は肉薄した。

ライブは手がつけれられないような、状態になった。

するとそのとき、ステージのスピーカーから、大音量でギターの
音が刺すように走り抜けた。

ギターを抱えた少女は目を閉じ、弦を、叩くようにはじいている。
始めはただの爆音で、馬のいなくような音が、次第に整ってき
た。

少女は高速で指を操る。

観客は吸い込まれるように、彼女を注目した。

徐々に演奏はフェードアウトし、マイクを持つ少年は、ギターを
ひいている少女へ、視線で合図を送ると、マイクを抱え込むように
持った。

ベースの男は釈然としない様子だったが、これを期に自分の位置
に戻っていった。

少年はまるで何かに魅入られたように、頭を揺らし歌い出した。

ギターはコードを変調させ、少年の歌声と重なり合った。

ドラムとベースも、たどたどしくはあるが、ついてくる。

それらは一体となって、少年の力強くて芯が通った歌声に、導か
れていった。

いつのまにか、観客は静まり返り聴き入っていた。

少年は掌を上にして水平に腕を上げ、半拍置いてそれを下げた。
その合図をきっかけに音が収束する。

少年はゆつくりと目を開けた、両目は涙で濡れていた。

無言でマイクを置いて、ステージを降りて歩き出す。

パチパチと拍手が起き、一気に爆発した。

少年が扉の取っ手に手をかけたとき、

「ちよつと隆君!？」

と、ベース男の声が場内に響いたが少年は、無視をし扉を開けた。モッズコートのポケットに手をつ込んで、階段を下りる。

ステージのちょうど真下に、駐輪場があつて、そこにバイクはあった。

少年は、駐輪場に止めてあるバイクに、腰を掛けハンドルロックを外した。

流線型のボディ、戦闘機のようなスタイルでウインカーはついていない。スクーターのような形をしているが、ナンバーからして原付きではないことは伺えた。

キックペダルを踏み込む。それを数回繰り返すがエンジンはかからない。

「おい、がんばれよ!」

少年はバイクに向かって言った。

「かわいいバイク」

少年が振り返ると、ギンガムチェックの服を着た女がそこにはいた。

「あ、さっきの女」

少年はそう言つて、バイクのエンジンをかけるのをあきらめ、シートに腰をかけ女と向き合った。

「歌うまいよね。題名聞かせて!」

「題名つて言つてもな……さっきできた曲だし……勝手につけていいよ」

「え? 即興で全部やったの? ウソだ! ギターの子とすごいコラボしてたし」

「ギターね、あれは特別。でも、さっき浮かんだメロディだし、そ

う、あんた見て作ったから、何かのイメージにはなってるかもな」
女は少年の肩をつかむと揺さぶった。

「お願いだから違うって言って、実は邦題があったりするんでしょ
う？」

「アリエネエこの人しつこいよ、何、何、これってナンパ？」

と、少年は笑いながら言った。

「声をかけたのはそっちが先！」

それから、女は妙に真剣な表情をして手を離れた。

「俺は隆そっちは？」

「わたしは真紀」

「二人ともありふれた名前だな」

少年はシートから腰を上げると、全体重をかけるようにキックペ
ダルを踏んだ。

白煙がマフラーから出て、パンパンと音が響く。

そのとき、階段の下に数人が現れた。中でも、サンタクロース姿
の少女は腕を組んで、バイクにまたがる少年を見つめている。

少年は慌ててジョッキーマヘルメットを被ると、

「ヘルメット貸して！」

女も慌ててそう言った。

モッズコートのアスナーを上げると、少年はバイクを走らせた。
鉄骨で覆われた低い天井に、ハチの羽音のようなマフラー音が響
いた。

アスファルトを滑るように進む。

雪が二人の肌を叩いた。

先頭に立つ面長の少年は、バイクにまたがる二人を見て、額に手
を置いた。

サンタクロースの姿の少女は、険しい目つきで睨んでいる。

少年はニヤリと笑ってアクセルを回した。

デコボココンビ 1

羽柴良太は大声で、

「恭ちゃん起きて！ 新学期だよ！」
と、言った。

橋本恭介は耳元で聞こえる、騒音から逃れようと、布団の中に潜った。

「今日から学校行くて、約束したよね」

良太は恭介の肩を揺さぶる。

「俺、やっぱり行かない……」

「恭ちゃん、嘘をついたりする人じゃないよね」
と、言つて、良太は布団をはがした。

「わかったから……」

「恭ちゃんが行かないなら、僕も学校休む」

恭介はやっと起き上がった。目をこすりながら、
「用意するから、下回つて」

と、恭介は言つて、部屋を出た。

橋本家は二階建てで、この部屋から出てすぐ右側には、外へと降りる勝手口があった。

良太はいつも勝手口から、この部屋まできている。

恭介の両親は引きこもりな息子を思つて、良太に定期的に電話をし、外に連れ出してほしいと頼むが、良太は言われなくとも、そうするつもりだった。

外で待っていると、恭介は出てきた。眩しそうにしている。

身長はとても高く、肥満とはいかなくとも肥満の子供くらいには太っている。

これといって顔の特徴はないが、太い眉が柔らかい印象に不釣り合いである。

良太は恭介に比べると身長の高さは際立っている。

前髪は顔を隠し、陰気な印象を与えている。

「恭ちゃん、おはよう」

「お、おはよう良太君……」

それから二人は自転車で学校へと向かった。

高校は市内の外れにあつて、橋本家から自転車で二十分程度の距離だった。

ここ、鶴左市は海の幸、山の幸が豊富で、日本全国でも有数のリアス式海岸を備えている。県からは南東部に位置し、人口はおよそ七万人。そんな九州の田舎である。

良太はペダルを踏みながら思案した。

恭ちゃんをこれから、毎日学校に通わせるには、僕はどうすればいいんだろう……何か良い方法ないかな？ やっぱりあれしかないかな……でも、

半ば答えが出ているが、躊躇っているのだろう。

そんな良太を知ってか知らずか、恭介の表情は、学校に近づくにつれ強張っていく。

「大丈夫だって、僕らそんな目立つ存在じゃないし、案外みんな気にしないと思う」

「……」

二人は並走しながら話している。

「それよりさ、今期アニメって、できくないよね……」

良太は恭介の緊張を、和らげようとしているが、効力はないようだ。

校門に差し掛かる頃には、恭介の緊張はピークに、達しようとしていた。

「俺、やっぱり帰る……」

恭介はブレーキをかけて、止まると言った。

「駄目だよ！」

慌てて良太も止まる。

行き交う生徒は、そんな二人を見て冷笑している。

そのとき、二人の横を、ギターを背負った女子生徒が通り過ぎていった。

身長は低く、まるでギターに押し潰されそうである。

良太は自転車を、恭介の横につけて、

「このままでいいの？」

と、ささやいた。

恭介は顔をしかめ、耐えるように、駐輪場へ向かった。

良太も後を追いかけた。

二人は三階の2-Fと書かれている、教室に入った。

恭介の足取りは、教室に入るまで重かった。

二人が扉を開けた瞬間、視線が集まったが、それも長くは続かず、意外と、あっさりとしたものだった。ただ、クラスの生徒からは、疎外されている感じではあった。

良太の席は窓際が一番後ろの席で、恭介はその前だった。

恭介はおずおずと席に腰を下ろすと顔を机に向けた。

「大丈夫？」

と、良太は声をかけたが、恭介は黙っていた。

しばらくすると担任がやってきて、ホームルームが始まった。

始業式の間、良太はクリスマスライブを思い出していた。

きっかけは朝方見かけた、山中椿だった。椿はライブ中ギターを担当していて、会場の騒ぎを収めた張本人だ。あのギター演奏がなければ、ライブは中断していたのかもしれない。

バンドをすれば、前の恭ちゃんに戻るかもしれない。

それほど、あの日のライブは、二人にとって刺激的だったのだ。ヴォーカルの人って確か、A組の人だったかな……あのとき正式なメンバーじゃない、みたいなこと言ってたし……。

とにかく良太は声をかけて、バンドに誘ってみようと考えた。

学校が終わると良太は、恭介に先に帰宅してもらい、校門近くで

A組の彼を待った。

しばらくすると彼はやってきた。

話しかけようとしているうちに、尾行するような形になった。

市民体育館で右に折れて、良太も慌てて追った。

距離を縮めた。

彼はバイクにまたがっていた。

「あの」

良太はおごそかに言った。

「クリスマスライブで、ヴォーカルをしてましたよね。すごく歌上手なんですね。僕、F組の羽柴良太と言います」

「で　？　何？」

「それでその……バンドのメンバー募集してまして、あの……お名前聞いてもよろしいですか？」

「バンド、おまえが……？　俺は隆な」

「それでは改めてお願いします、隆君……一緒にやってくれませんか」

「わるい、アリエネエ……おまえ本気で言ってるそれ？　それより俺がバイクで、学校通学してることに、ちくつたらゆるさんぞ」

と、言っていてしまった。

隆の突き放すような態度に、最後は何も言えない良太だった。

「間が悪かったのかな……」

良太はあきらめて、帰宅することにした。

机の棚や壁にはアニメグッズ、フィギュアや、ポスターなどがあった。

整理された室内だったがそれら物が圧迫している。

良太は帰宅すると部屋にすぐこもり、パソコンの電源を入れて、ネットサーフィンを始めた。

ブラウザを起動させ、検索単語を入力する。「歌手」や「バンド」といった文字が並んでいくディスプレイを、真剣な眼差しで追いか

けている。

「なるほど、バンドをするにしても、僕はどんな楽器を演奏するんだろう」

最も大事なことを、忘れていた良太であった。

「それに、恭ちゃんは賛成してくれるの？」

ネガティブな思考に押され、溜め息がこぼれた。

僕は周りが見えてないって、昔の恭ちゃんにしかられてた……。

ともかく、普段アニメソングを聴いて過ごしているので、流行曲でも聴いてみようとして、「JPOP」と動画サイトで検索をかけた。

一番上にあつた動画を、良太はクリックした。

すると、女性アーティストの静止画が現れ、音楽が流れ出した。

クリスマスソングが流れている。

良太は曲を聴きながら、コメント欄に目がいく。

「だれだ？ SAYAの曲無断でアップしてるやつは、やめろ！」

「貴重な画像ネットに流すな」

「いまどきアニソンの曲を、ネットに流して注意する親切なやつがいるとはな」

「何がアニソンだ、おまえらがいるから、ジャケットの表面にキモイ絵が入ったんだよ。SAYAの画像は貴重なんだよ！」

コメント欄には罵詈雑言が飛び交い、収拾がつかないような状態になっていた。

それから良太は気になって、匿名掲示板で同様の記事を探したが、スレッドタイトルに「二次元と三次元の戦い」などと題しているものまである。

しばらく記事を見ている限りでは、SAYAという女性シンガーの、新曲ジャケットの表面に、アニメの絵を使っていた、ということらしい。

これだけなら何を大げさに、と感じるかもしれないが、そのSAYAというシンガーは日本で最も認知度が高い歌手で、そして音楽活動以外行っていない。テレビにもラジオにも雑誌にもでない、し

たがってファンはCDについている、ブックレットからしか彼女の姿を見ることはできない。つまりファンは、アルバムジャケットのアニメ挿し絵事態、気に入らないのである。

良太が掲示板を見ていると、祖母の夕食を呼ぶ声が聞こえたので、良太は部屋を出た。

夕食後しばらく、祖母と祖父とでとりとめもない団欒があった。

良太は恭介と同じ学区内になるために、両親とは離れて暮らしていた。

元来おばあちゃん子だった良太は、祖父母と暮らしていることに、恥ずかしいや煩わしいといった、若者特有の感情は抱いていなかった。

夕食後、入浴を済ませ再びパソコンの前に座って、バンドのことを調べていった。

とにかく 隆君にヴォーカルを頼むにしても……最低でも後一人、メンバーが足りないよね……ギターとベースとドラム、僕はどんな楽器が向いてるんだろう……。

「よし、うだうだ考えてても何も始まらないよね」

と、良太は言ってキーボードをカタカタと叩いた。

「バンドメンバー募集します。メンバーになりたい方は僕、羽柴良太まで連絡してください。090-*****」

それから文字をプリントアウトし、ブレザーのポケットにしまいと、ベットに横になった。

デコボココンビ 2

担任から掲示板利用の許可は下りたが、バンドメンバー募集という紙面を見て、以外そうに眉をひそめて言われたのだ。

「羽柴がバンドねえ……」

不謹慎だと思ったのか、担任は咳払いでごまかしていた。

良太は今日も恭介を、学校まで登校させることに苦勞したのだ。担任が教室から出て行き、どつと疲れたように席に戻り腰を下ろした。

「良太君どうしたの？」

と、恭介は聞いてきたが、

「何でもないよ」

と、バンドの件を伏せる良太だった。

恭介は案外平気そうな表情をしているが、良太はこれがずっと続くとは思っていないのだろう。些細なきっかけで登校拒否に陥るものだ。

だがしかし、原因にいたっては星の数ほどありそうだが……。

午前の授業も終わり、良太は二階に下りて、職員室横の掲示板に、昨日のうちに作成したメンバー募集の紙切れを張った。

恭介はそんな良太を見て言った。

「良太君バンドするの？」

「まだやることあるんだ」

良太は職員室前で、大木のように突っ立っている、恭介を置いて先に行く。恭介も無言で後を追った。

「早くしないと、お弁当食べる時間がなくなっちゃうね。僕、A組に用があるから、恭ちゃんは先に食べていいよ」

と、良太は言って階段を上がっている。

A組の前に到着し、良太はガラス戸から中を見渡している。そして隆を見つけると、やおら入室したのだ。

恭介は窓際に所在なげに立っている。

「あの、昨日はいきなりでした、ごめんなさい。今、大丈夫ですか？」

と、良太は言ったが、隆は歯牙にもかけていない。

机二つ並べた隆の向かい側で、弁当を食べている松尾淳一は、チラチラと隆を伺っているが……。

「僕たちのバンドの、ヴォーカルになつてくれませんか？ 一人足りてませんが……先ほど職員室に、張り紙をしてきたところです」

隆は顎を突き出し、はしを置いてから言った。

「俺、飯くってんだけど……何おまえ？ 昨日言つたるバンドはしねえって」

「はい、でも……昨日は間が悪かったのかなって思ひまして……」

「今はどうだ？」

「とても悪いみたいです……」

「で、一応聞くが、おまえの他に誰がやんの？ おまえ楽器できんの？」

「えっと……僕の他には……」

そこで良太は、廊下に立っている恭介を指さして、

「恭ちゃんと、僕と……あの、言いくいんですけど、楽器はまだ、持ってません」

そこで、松尾がばつが悪そうに額に手を置いた。

「アリエネエ！ おまえおちよくってる？ 楽器もいいけど、見た

目どうにかしろよな、なんだよその前髪、素材悪くねえんだから、努力くらいしろ、話はそれからだ！」

「はあ……見た目ですか……」

「勘違いすんなよ、俺は松尾みたいに偏見ないからな、とにかくバンドはやらない。じゃ、そういういことで」

隆はそう言つて片手をひらひらと上げた。

良太は仕方なく、引き下がり教室を出て行く。

そのとき、昼休みが終わりを告げるチャイムが鳴った。

「ごめん恭ちゃん」

良太は廊下に出て恭介に、拝むように謝った。

学校帰り恭介の家に、良太は立ち寄った。

恭介は言葉少ない良太を心配していたが、寡黙な性格から気の利いたことは言えなかった。

良太は椅子の背もたれを逆にして座っている。

恭介はベットに腰掛けていた。

「ねえ、僕たちってさ、外見とか気にしたことなかったよね……髪型とか、服装とか、今まで普通にしてたつもりだったけど、普通の基準を知らない僕は、やっぱりただのオタクなのかな」

恭介は静かに聞いている。

「なんだか空回りしてる。ごめんね恭ちゃん愚痴って……」

「いいよ、俺気にしないから」

良太はしばらく目を瞑り黙り込んでいたが、家庭用ゲーム機を取り出して電源をつけて、

「だって、おもしろいもんね。アニメやゲームって」

と言って微笑した。

恭介は隣に座り直してコントローラーを握った。

それから二人はしばらくゲームに没頭した。

「やったねブイ」

ゲーム画面上では良太のキャラクターが屹立し、恭介のキャラクターが倒れ込んでいる。

良太はゲームで勝ったのだが、現実でもポーズを決めている。そのブイサインはちょっといや、かなりぶっかこうである。

「恭ちゃん、明日はちゃんと起きてね」

恭介は黙ってうなずいた。

そろそろ夕食時でもあるので、良太はきりのいいところでゲームを終わらせ、ゲーム機を直した。

「また明日来るよ」

「うん……」

空は茜色に染まっている。

良太を勝手口まで送る恭介は、おずおずと言った。

「良太くん、バンド本気をするの？」

「わからない、恭ちゃんはどう思う？」

恭介が質問を質問で返されて、答えに窮していると、

「中学の頃はいじめられていつも恭ちゃんに助けてもらったでしょう。でも高校生になって、恭ちゃんの欠席が増えて、どんどん性格が変わって……昔の恭ちゃんは、とても静かだったけど、どっしりしてたと思う。だからこのままじゃいけないって、でも僕何もできなくて……あのときチケット押し売りされてライブいってさ、隆君の歌声を聴いたときにこれしかないって感じたんだ。だから僕決めたよ、バンドをするって！ 今度は僕が恭ちゃんを助ける番だね」

と、良太は言っただけで肩を下げた。

「バンドということを思いついたのは始業式の前日なんだよね」

「あのおれ」

と、恭介が言ったがそのときにはもう、良太は踵を返していた。

おちびなギタリスト

山中椿は、夢見後心地だった。

ふらふらする足取りで、自室にある冷蔵庫を開けると、月とうさが描かれている箱の中からプリンを取り出した。プリンの他にも和菓子や洋菓子が幾つかあった。

机の横には鏡台があつて、鏡と向かい合うようにプリンを食している。むしゃむしゃと。

時折体が震えている。それは口を動かす合間に左手で、エアギタ―さながら指を動かしているからである。

ふだん物事を深く捕らえる傾向にある椿だが、朝のいつときはこーうやって思考が奪われている。これは山中椿が停止している時間であつて、決して素ではない。

山中椿の親友である、隆がこの痴態を見れば、ニヤリとすることだろう。

今は、故合つて二人は口を聞いていない。

食べ終わる頃には意識も目覚めており、椿はまばたきをする、机に向かった。

「私の足長おじさんへ」

という出だしで手紙を書き出したのだ。

手紙を書き終えると、丁寧に三つ折りにして、かわいらしい柄の封筒に収めた。

それをバッグに入れてから、椿は扉を開けた。

台所にはテーブルに突っ伏した母が、椿に気づいて、

「椿ちゃんおはよう、母さんまた、負けちゃった」

と、言った。

母は、上品そうな顔立ちではあるが、所々白髪があつてやつれて見えた。

椿はそんな母を無視し、洗面台に向かい歯磨きをした。

およそ一年前、椿は家庭内別居を始めた。

今では母子が、話することすら珍しいのである。

ギャンブル依存症の母を何とか改心させようとしていた椿も、母が自分の机の中をあさっている姿を見て匙を投げた。

椿は孤独を知っていた。

どうしても気持ちが落ち込みやりきれない日は、ただ部屋に閉じこもりがむしゃらにギターをひいた。そうすると自然に落ち着くのだ。

物心ついたときにはギターをさわっていた。

雑然とした物置に、幼い椿が初めて演奏した、ギターがあつた。

椿が幼いころ、両親は離婚した。

父が最後に残したものは、そのクラシックギターだった。

決して開かれることのないその部屋を通り過ぎるとき、椿はほこりの被ったギター、その一角を見入ってしまうのだ。

用意が終わると、椿は家を出た。その間、母を見ようとしなかった。

背には体と不釣り合いな、ギターを背負っていた。

県営住宅から学校まで、徒歩で十分程の距離で、椿はその日の気分によって自転車通学と徒歩通学と変えていた。

道路を挟んでなかえ川が横たわり、橋を越えて遊歩道を通って道路を右に折れると校門から近い交差点が見えてくる。

教室に着くまで誰一人挨拶を交わすことなく、席についてからも松尾一人がすれ違いざまに、「おはよっす！」と声をかけたくらいだった。

ホームルームが終わると担任に呼ばれた。

それは保護者の承諾が必要な、提出物が出ていないせいだった。

担任の村山は、

「昼休み先生の所に来るように」と、言った。

午前の授業が終わり、椿は担任の言いつけ通りに、職員室に向かった。

廊下を歩いていると、掲示板に目が留まった。
バンドメンバー募集という掲示物だった。

クリスマスライブの後、椿はこれまでバンドの練習、ギターの上達のために何とか耐えてきた、メンバーの質の悪さ、いい加減さに我慢できず、あのバンドを抜けたのだ。

そこでこのメンバー募集は渡りに船だった。

同じ学校の人なら何かと便利かもしれない。

椿は携帯のメモリーに、羽柴良太の番号を記憶させた。

溜め息をついてから、良太は首を横に振った。

「今日も駄目だった……隆君たちと僕たちとじゃ、何だか住んでる世界が、違みたいだよ……」

良太は恭介をうらめしそうに見つめて言った。

「世界……」

「今のままじゃ駄目だってそう思ったんだよこんなオタク！」

「バンドと関係」

「意地になつてきたかもしれない。けどさ、ダサイよりカッコイイ方がいいよね？ もてないより、もてるほうがいいよね……僕たちこれじゃ駄目だ！」

良太は話しながら興奮している。

「ライブのときの隆君、恭ちゃんも見たでしょう。あのときの歌を聴いて、僕の中に何かが駆け巡った……そんな気がするんだ」

「俺、音楽詳しくないけど、良太君の言ってることわかる」

「ごめんね、八つ当たりして」

良太はそう言って教室へと入っていった。

恭介も後に続いた。

二人が弁当を広げているとき、良太の携帯電話が鳴った。

恭介は良太の表情が、ころころと変わるさまを見逃さなかった。

電話が終わると良太は喜び勇んで言った。

「恭ちゃん、バンドの後一人が決まったかも！」

待ち合わせ場所は、学校からも近い、遊歩道沿いの噴水のある公園だった。

二人は落ち着きなく辺りを見回している。

学校が終わると、恭介を引っ張るように連れてきた良太だった。

恭介は芝の上に立ち空を眺めている。快晴である。

良太はにこにこしている。

二人が立っている後ろから、彼女はやってきた。

「もしかして、あなたが羽柴良太？」

良太が振り返り、恭介も振り返った。

「はい。僕が羽柴良太です」

「じゃあ、あなたが募集かけのたのね、あたしは山中椿」

恭介は振り返ってすぐに、ロボットののような動きでぎこちなく固まった。

「はい、山中さんですよ。A組の」

「知ってるんなら話は早い。あたしは」

後ろのギターを指さして、

「ギター希望かな、そっちは？」

「えっと……非常に言いにくいんですけど……楽器はまだ持ってません……」

良太はそう言って、引きつった顔で恭介を伺った。

まさか、あの山中椿が来るなんて、思っても見なかったのである。

それは恭介も同様だろう。

「え？ 誰かに貸したとか？ 壊れたとか？」

「いえ、全くの初心者です」

椿は目をすつと細め、腕を組んだ。

「あなたたちからかかってるの？ 募集じゃなくて、仲良くバンドしましょうでしょうそれは！」

「そうですね……」

良太はたじたじである。恭介は助けてくれそうもない。

「じゃあ、あなたたち、見た目通りのただの凸凹コンビのオタクじゃない」

「だから隆君も、とりあつてくれないうだね」

ぼそりと良太が言った一言に椿は反応した。

「何、あなたたちって隆の知り合い？」

「知り合いというか、ヴォーカルになつてもらいたくて……毎日誘つてるんですけど、断られ続けて、見た目からなおしてこい、話はそれからだつて言われました」

「隆がそう言ったのね！」

椿は腕を組んだまま、勢いよく言った。

「あの、本当にご迷惑かけました……僕たち出直してきます」

良太がそう言うのと、

「待ちなさい！ まだ話は終わってない、凸凹コンビ！」

二人は肩を震わせた。

「デブは遊歩道を走る！ チビはあたしについてくる！」

恭介は、ぎこちなく首を回し一度椿を見てから、

「はいっ！」

と言つて、走り出した。

「あの、どこにいくんですか？」

と、良太は言ったが聞き入れてもらえず、先に歩き出した椿の後を追った。

椿は住宅に寄つて、自転車に乗り換えた。

徒歩で付いてきていた良太は、それからは走りに変わった。

国道沿いにいって、二人はコスモスタウンフリーモール、市内の中心部へと入ったのだが言わずもがな、良太は汗だくである。

暖房の効いたきれいな室内、奥にはソファがあつて、入り口からすぐ近くにはカウンターがあつた。

椿は良太を無理矢理室内へと引つ張りこんでから、カウンターに立つ男に、

「ゆかりちゃんいる？」

と言った。

「椿ちゃん、今日はどうする」

と、男は言いつつも、顔だけ振り返り奥にいる女性を見た。それに気づいた、女性は椿に向かって手を振って合図をする。

「うーん、あたしじゃないんだ。今日はこいつの髪を、どうにかしてほしいのよ」

生まれて初めての美容院で、良太は緊張している。

「どんなふうにする？」

男は良太の厚ぼったい髪を見て言った。

「とにかく、かつこよく 無理だわ。かわいくしてくれれば」

男が良太の髪をかき上げると、

「あ、ごめ、眉もしてあげて、サービスで」

と、椿は言った。

「うちはそんなサービスやってないんだけどな、それじゃ少し待っててね」

男はそう言つて、奥へいった。

「良太、あたしこれから用事あるから、帰らなきゃだけど、逃げたりしたら、メンバーになつてあげないわよ」

椿は、入り口に手をかけ振り返りながら言った。

「え、じゃ、じゃあ！ 一緒にやつてくれるんですね！」

と、良太が言った。

「まあ、あなたたち次第だわ、隆を引き入れるのは難しいわよ」

「僕、がんばりますから！」

「それじゃあね、走ってるやつの方もよろしく」

椿は出ていった。

恭介は走っていた。体は汗まみれになり、呼吸も荒くなるが足を

止めなかった。

今まで、ただ見ていただけの存在の山中樁と、話をする事ができたのだ。

それがかなった今、走ること何の苦労があるというのだろう。

一歩一歩進むたびに、思考がくつきりと浮かび上がってくる。

今までの怠惰な自分を呪った。

こんなことなら、痩せておくんだった。今さら、そう思っても遅いが、それでも完全にあきらめていた事柄に、ほんの少しだけ希望が見えた。

夕焼け色に染まる公園　良太君は何をしているんだろう……。

恭介が遊歩道の入り口を迂回しようとし、顔を上げたそのとき、人がいたので、避けようと体を動かして走る。

ちようど逆光になり辺りがよく見えない。

「恭ちゃん！」

驚いて恭介は立ち止まり振り返る。

そこには良太が立っていた。

まゆ毛を細く整え、長すぎた前髪を切り、短く無造作にまとめたその愛らしい容姿は、童顔な良太にとってもよく似合っていて、同一人物とは思えなかった。

「良太君？」

「そうだよ、わからなかった？」

恭介は傍らにいくとまじまじと見た。

「俺、驚いた。本当に良太君だ」

「終わって鏡を見たとき、僕もびっくりだよ、ねえ似合ってるかな？」

「う、うん、すごくそのいいと思う俺」

良太はにつこり笑うとブイサインを作って

「恭ちゃんやったね、ブイ」

以前と同じオタク的動作なのだが、良太の外見が変わったことにより、とてもよくにあった。

恭介は口をポカンと開けた。

「あのね、恭ちゃんもバンド一緒にしてくれるよね。山中さん入ってくれるって」

恭介は良太をじっと見つめて、

「俺も……。やりたい」

と、言った。

「ほんとのほんとに？」

良太はつぶやくように言った。

「俺もやる！」

と、違和感のある大声で恭介は答えた。

「よかった……撲う……恭ちゃんがいやだっていったらもう……」

それから二人は帰るべく並んで歩き出したわけだが、どこことなく恭介はよそよそしかった。

アンバランスな日常

明け方、携帯電話が鳴った。二度、三度と呼び出し音が続く。隆は寝惚けて携帯を投げつけ、壁に当たる。

いまどきの高校生は着信音を、デフォルトの状態で使う輩は少ない。

そのためか、ピピピというやかましい音は妙に家中に響いた。今日こそは無視をしてやる。

隆は、「ああ」と声を漏らした。

こんなやりとりがここ数日続いていた。

毎日決まったような時間に、こうやって起こされてしまうのである。

隆は携帯電話を取って通話ボタンを押した。

「真紀、おまえさ、今何時か知ってる？」

と、言った。

「どうしてわたしってわかったの？」

受話器からは、真紀の声が返ってきた。

「おまえしかないだろ！　じゃそういうことで」

「ちよっと待ってちよっと待って」

こうやって結局隆は眠れぬまま、学校へと行くのである。

隆が、切ろうとするたびに、ちよっと待ってちよっと待ってと繰り返すのだ。

ようやく話も終わるころ真紀は、

「今日も学校よね、いつてらっしゃい」

と、まるで自分がモーニングコールでも、しているように、しめくくるのだ。

携帯電話を鞆にしまうと、アンティークなレコードプレイヤーに、針を落として音楽を流す。六十年代のロックが流れている。その間、着替えを終わらせると、隆は居間に出た。

「お兄ちゃん、誰といつも話よるん？」

と、妹の恵は朝食を食べながら言った。

二つに結んだ髪の手が揺れている。

「別にだれでもいいだろうが、おまえに関係ねえ」

「もしかしてさ、ライブのとき二人で逃げた、女の人じゃないん？」

隆も座り、朝食を食べる。

「メグな、受け付けしよったやろ、あの人誘った張本人なんよ」

「アリエネエおまえか、一般人引き入れたやつは」

「あの日、椿さんと仲直りした？」

「いや……」

妹は肩を落とした。

「三人でせっかく計画練ったのに……おにいちゃんのバカ」

と、言つて、恵は立ち上がった。

「なんだ計画つて、俺聞いてねえよ」

「知らないのは、おにいちゃんだけ」

それから妹は、浴室の方へ歯磨きをしに向かった。

隆は（？）で朝食を食べ上げると自室に戻った。

しばらく音楽に耳をかたむけていた。

すると用意を終えた恵がやってきて、

「お母さん夜勤明けで、今寝とるけん」

と言つて、恵はどたばたと足音を立て学校へ向かった。

隆はゆっくりと浴室に続く扉を開けると、泥棒のような足取りで

畳みを踏んだ。

奥には、母が寝ているのが見える。

壁際に乱雑に積み上げられていた、漫画本が揺れて落ちた。

すると、母はぬつと上半身だけ起こして、

「バタバタうるせえ！」

と、怒鳴つて隣にあった枕を投げつけた。

隆は思わず悲鳴をあげそうになったが、何とかこらえた。

洗面台についたときには、おもわず溜め息がもれた。

「あぶねえ、起こしたら殺される」

と、言って、歯磨きを始めた。

顔を洗ってタオルで拭く。

「計画って何だよ」

自室に戻って用意を終えると玄関に向かった。

隆はバイクのエンジンをかけると、道路に走り出た。

形状はスクーターのようだが、イタリア製のバイクで排気量は百五十ccである。

学校では、原動機付き自転車の取得は校則で認められているが、自動二輪の免許は校則違反に当たる。

しかし、外見がスクーターにしか見えないことと、生徒の自由を重んじる校風、白紙の生徒手帳とこの学校では呼ばれているが基本的には校則が、あつてないような状態になっている。

そのまま学校まで乗っていくことはできないので、市民体育館にバイクを止めて、そこから徒歩で学校に向かった。

ちょうど交差点で松尾淳一が、にやにやと笑いながら隆に話しかけた。太い眉が印象的で横にも縦にも身体は大きい。

「よう、眠そうな顔してるなあ」

と、肩を回してきたので、

「暑苦しいぞ、おっさん」

と、隆がやり返す。

「俺のどこがおっさんだ？」

信号が青に変わり歩き出す。

「すべてが」

「じゃあおまえは、オカ」

「それ以上言ったらゆるさん！」

ちょうど、校門が見えてきて、横断歩道を二人は渡っている。

そのとき、山中樁がギターを背負って歩いているのが二人の視界に入った。

松尾は、

「今日も一匹狼ですか、山中はほんとにクールだぜ、ま、そんな俺はアウトローだが」

と、椿を見て言った。

「おまえのどこがアウトローだよ」

チャイムが鳴ったので二人は急いで教室に向かった。

ホームルームが終わると、隆は担任の村山の下へいった。

「先生ビデオまだ？」

「悪いな。先生まだ、ダビングできてない。もうちょっと待て」

「ま、大事にしてくれるんなら、いつでもいいけど」

「しかし、よくあったな、何年も前の特番の映像」

「母さんが残してくれてたから」

「そうか、先生悪いこと聞いた」

「いや、いいよ。それより、どうビデオ？」

「凄いなあ、まさにあのバンドの音楽だったよ。死して尚語り継がれる」

「そうそう、で、テープの音源で音悪い部分はコーラス入れたりね」

「六十年代のロックで、リーダー死んでいるから、本格的な再結成は無理だ。でも、先生泣いちゃったぞ」

「俺も俺も」

隆は興奮し、饒舌になりつつある。

そこでチャイムが鳴って、

担任は隆の肩を軽く叩いて、教室を出て行った。

昼休みになり、松尾と昼食を食べている。

「それ、メグちゃんの手作りだろ、いいな」

「別に普通だろ、何がいいんだ？」

「おまえってやつは、女心もとい、妹心のわからんやつだな」

「アリエネ弁当」ときで大げさだな」

「じゃあくれ」

松尾が隆の弁当に箸を落とそうとするが、隆はことごとく避けていた。

そんな隆を生温かい目で見ている松尾。

「ライブのとき、メグちゃんのサンタ姿、かわいかったぞ」

松尾がそう言つと、隆は思い出したように、

「おまえさ、恵と何かたくらんでただろ」

「何のことだか」

「椿のことだ」

「何のことだか」

そう言っている、後ろから声がした。

「あの……隆さんバンドの件でお話があるんですけど、今いいですか？」

声だけを聞いて隆は、辛辣な表情を作った。

「おまえな、いい加減あきらめろよ」

と、振り返つて一瞬だれと話しをしているか喪失した。

「僕、少しはましになりましたか？」

良太は恥ずかしそうに、はにかみながら言った。

「驚いた！ 食ってるもの吐きそう」

良太は笑い声を上げた。

「おまえさ、えっと、羽柴……良太だよな？」

「はい、そうです」

「すげえな、デヴューしたな！ 遅い高校デヴューおめでとうな。

まさかここまで変わるとは」

松尾も驚いている。

「あ、ありがとうございます！」

「前向きなオタクだなとは思ってたが、顔と内面が合致したな。ああ、俺、そこらへんにいる、趣味も情熱も何もないやつより、オタクの方がましだと思ってるから、安心しろ」

良太はまじまじと聴いている。

「みんなが好きと言ったら好き、ファッションにしる、音楽にしる。個性も何もねえからな……これからが大変だぞ、とにかく、自分の色を見つける、雑誌もみなきやな、しかしよくがんばった」

良太は涙ぐんでいる。

「じゃ、じゃあ、一緒にやってくれるんですね？」

「それとこれとは話が違う」

松尾が額に手を置いた。

「あの、約束が……」

「何？ 俺、おまえが変わったら話は聞くって言ったけど、入るとは言ってねえ」

「そうでしたね……でも僕絶対にあきらめませんから」

「ま、でも、これから気軽に話しかけれ、じゃあな」

良太は教室から出ていった。

土手の小道には、重そうな衣服を着込んでジョギングしている主婦。

その下、河川と青い草の斜面に挟まれた広場には、犬の散歩をする少女、

隆は学校が終わると、家には帰宅せず、近所の土手で川縁の石段に腰をかけて、首からノートをぶら下げている。

目を閉じ、息を吸い込み、歌い出した。

その歌声はこの光景に違和感を与えず、空気のように透明に流れていった。

時折、口を動かすのを止めたかと思えば、ノートに何かを書き込んでいた。

隆が父、宏大の影響で六十年代の音楽を好きになり、初めて歌ったのがこの場所だったのだ。それからというもの、毎日隆は歌った。宏大は、二歳の隆が英語でLucyと発し、歌い出したたそのとき、大粒の涙を流して喜んだのだ。

幼い隆は抱きしめられながらも、

宏大に対して、こうすれば喜んでくれるんだ。と感じ、ますます歌にのめり込んでいった。

それと知らずに歌うという英才教育を受けていたのだ。

隆の家庭は、世間一般家庭とは少々異なっており、父、宏大は女装している姿が普通であつたし、家事をこなしているのも当たり前であつた。

母、涼子は市内にある病院で看護師長をしている。

夜勤明けで機嫌の悪い涼子に、優しく声をかけマッサージをしていた、宏大の姿がそこにはあつた。

宏大が亡くなってからというもの、涼子と隆はよくいさかいを起こし親子喧嘩がたえなかつた。

それは、当たり前前の母を父親として接してきたせいだろう。

事実隆は、宏大のことを母さんと呼んでいたし、涼子のことを父さんと呼んでいたのだから……。

この場所にくれば宏大の、あの後ろ姿をいつも思い出す。

エプロンをして、長い髪の毛を後ろでまとめたその様子を、隆は歌い終わると立ち上がった。

川面を見つめ、ふと羽柴良太のことを考えた。

放課後良太に廊下で出くわし、バンドの件を断り続けているのに関わらず、元気よく「さよなら」と言ってきた。

不思議なやつだ、隆はそう思った。

夕食どきになると、涼子はのろのろと起きて来て、恵の作った料理に舌鼓を打つ。

ビールを飲んで、

「うめえ！」

「お母さんオヤジくさいからやめて」

「バカ息子、メグが言う長電話の相手はだれだ、女でもできたか？」

夕食に手をつけようとした隆に涼子が言った。

「友達友達」

「おまえ友達いたか？」

「失礼な」

「松尾君に椿ちゃん？」

「……」

「メグが言うには、ライブのとき女と逃げたらしいな、バカ息子」
涼子はニヤニヤと笑っている。

「恵！」

隆が一喝すると、

「だって、おにいちゃんが悪いんよ……」

と、言つて恵はテレビの方を向いた。

「おまえには関係ねえ」

「何イ」

涼子は怒鳴りながら隆の眉間に箸を直撃させる。

「もう、二人ともやめてよ。S A Y Aの曲が聴こえないから」

テレビは音楽番組をやつていて、ランキングを行っていた。

女性アーティストの歌が流れている。

「おまえさ、食べるのやめてまで、見るもんじゃねえだろ」

「おにいちゃんと音楽の話したくない。S A Y Aは違うんよ！」

「おいバカ息子、妹の夢を壊すな。おまえと、宏大さんは音楽の話になると、斜め上をいきすぎている」

「俺のことはいいけど、母さんのことけなすなよ！ ボケ！」

涼子はさつと立ち上がった。

「やめてよ！ もう……おねがいやけん」

多少の喧嘩ならとりあわない恵だが、さすがに止めに入った。

静まり返る居間、隆は夕食も早々に切り上げ部屋にこもった。

涼子は仏頂面で一升瓶の焼酎をグラスにくむ。

恵は番組が終わると食器を片付け始め、台所から洗い物をする音が寂しく響いた。

いつもの時間に真紀から電話がかかったが、隆は今までのように、

放置することなくすぐに出た。

そして隆は、夢うつつの中、なぜ宏大が死んでしまったのか、どうして歌が好きなのかと、いったことを淡々と真紀に聞かせた。

その日は一言も真紀は「ちょっと待ってちょっと待って」とは言わなかった。

もう一度打ち明けたい

小城舞は都内にあるマンションのエレベーターの中で、茜色に染まる空を見上げて、溜め息をついた。

最上階でエレベーターは止まると、ホールにあった豪華な飾りをいともせずに、軽快な足取りで歩いていった。

紺色のスーツに眼鏡をかけ、ワンレングスカットの髪を耳にかけ

る。

扉の前に立つとワイヤレス送信機を使って、施錠を解除した。

舞は靴を脱ぐとすたすたと、リビングまでいって革張りのソファーに、携帯電話を握りしめて眠る真紀を見て、深い溜め息をついた。

「真紀さん、起きてください！」

真紀はうなつて寝返りを打つ。

「今、何時だと思ってるんですか！ 地元に戻って、自堕落なところが少しは直ると思ったんですが……全く変わっていませんね」

舞は真紀の肩を揺する、そのとき携帯電話が床に落ちた。

それを拾って、着信履歴を眺めてから言った。

「今日も例の少年と話をしていたんですね。こんなに長い時間」

真紀は薄めを開け、それから驚いたように手を伸ばし、携帯電話を奪取した。

「ちよっと、もう、舞ちゃんやめてよ……それって、プライバシーの侵害っていうんだよ……ひどいよ……」

真紀は寝ぼけ眼をこすり、ソファーに座り直して言った。

「それで、そろそろ仕事しませんか？」

「私は社長令嬢だから、仕事なんてしなくていいし」

そんなことを言う真紀を見て、舞は軽い笑い声を上げた。

「社会的に迫害されそうな、恋愛をしている真紀さん」

舞はそう言いながらソファーに腰をかけた。

「何それ、恋愛じゃないよ」

「では何ですか？」

「友達？ いつもはね、私がとんでもない時間に電話をかけちゃうから、怒るのね。でも、今日は違った」

「ちなみに何時くらいにかけているんですか？」

「朝の四時くらい」

「普通怒るでしょう」

舞はそう言ってからひとしきり笑った。

「でもね。今日は何だかね。とてもシリアスな話をしたんだ。どうして歌い出したとか、母親についてだとかね」

真紀は誇らしげに言った。

「真紀さんが言っていた。その場で驚くようなメロディを紡ぎ上げ、それをとんでもない美声で歌いあげたっていう、彼の話ですよね？」

真紀はうなずいた。

「私はそんな妄想めいた話は信じられません。そもそも真紀さんにはそのとき、仕事のストレスというフィルターがかかってましたしね」

「信じてよー！」

「はいはい。そもそも地元へ里帰りを進めた私が、そのときの真紀さんの精神状態を一番よく知っていますから、それで、少しはおちつきましたか？」

真紀は黙って、唇を噛んでいる。

「もうすぐですよ、契約が切り替わる日まで……」

舞は柔和に言った。

「わかってるから、やらないと駄目だって……大丈夫だから……」

真紀は目を閉じて言った。

「そろそろ、着替えましょうか。顔を洗ったり、朝食？ 夕食？ を食べたりしないと、いけませんしね」

そう言っ舞はキッチンへ向かったが、真紀は慌てて声をかけた。

「あの、舞ちゃん……わたしが明日また、地元へ帰るって言っても怒らない？」

舞は驚いて振り返り、

「重傷ですね……彼、そんなに凄かったんですか？ 私には到底信じられませんね。プロデュースでもしてみますか？ 真紀さんの社長令嬢としての資金で」

と言って、舞は拳を丸め口に当てるとクスリと笑った。

「金持ちの道楽ですから」

真紀は起き上がり浴室に向かった。

コンビニエンスストアの硝子の壁を見ては、雑誌に目を通す。

そんなことをかれこれ、一時間ほど良太は続けていた。

椿に美容院に連れていかれて、容姿が変わってからというもの、いまだに鏡に映る自分を見ると、どことなく気恥ずかしさを感じた。隆に雑誌を読めと言われ、次の日噴水公園で椿にも、同じようなことを言われた良太だったが、パラパラとページをめくりながら、一体何が良くてどれが悪いのかがわからないのだ。雑誌にしても、ストリート系のファッションや、モデルばかりが写っている、ブランド志向な服が多数載っている雑誌もある。

良太はそんな中でも、同じような年齢の子たちが多く映って、趣味や年齢が記載されている本を取ると、レジに向かった。

良太にはまた一つ小さな悩みが生まれた。

恭介の態度があれ以降、よそよそしいのだ。

毎朝向かいにいくとすでに起きているし、帰りはいつも二人で教室から出ていたのに、校門を少し過ぎた所で待っていた。

そんなことを考えながら、家路についていると、後ろから声がした。

「いきなりごめん。高校どこ？」

良太は横にやってきた女子二人に見覚えはなかった。

「わたしたちと友達にならない？」

「え？ 僕のことですか？」

「カワイイ僕って、ねえ佐伯、僕とか言ってるこの子」

二人組の女子は、髪の毛を染めてスカートは短かった。

佐伯と言った女子は良太と同じ年くらいに見えたが、もう一人はその子からすれば大人っぽく見えた。

「あたしたちもコンビニいたんだけど、すっごいカワイイ子いるなって、追いかけてきたんだよね」

良太は唇を震わせながら、

「かわいいって僕のことがですか？」

女子二人はあいづちを打った。

それを横目で見ると、良太は駆けだした。

女子に目もくれずに、走った。

呼吸は荒くなり、緊張で体が浮いているような感覚だった。

そのまま家にたどりつくと、自室までいっきに駆け込んだ。

良太はしばらく身動きができなかった。

運動靴を履いて、頬をパンパンと二回叩いた。

勝手口の扉を開けて、二階から階段を降りて、道路に出ると恭介は土手に向かった。

土手の小道につくと軽い準備運動を始めた。

それが終わると、走りだした。

時折すれ違う人たちは、まだ走り始めて間もない恭介を、温かく迎えてくれたようだ。

今もすれ違いざまに会釈をされ、それに答え軽く頭を下げた恭介だった。

次第に体が重くなり、汗が玉のように流れた。

小道から河川の下の道を通って一周する、それを繰り返すのだ。

恭介は椿に言われこうやって、朝と夜に土手を走るようになったのだが、運動は苦手でも走ることは、自分に向いているなと感じたのである。

恭介は、人に何かを言われながらするよりも、淡々と作業を続け

るようなことに向いていた。

動いているときは何も考えなくてすむ。

しばらく走り、川縁の石段で休憩をとる。

恭介は良太と以前のように、接することができない、自分に腹を立てていた。

それだけ良太の見た目が変化したのだろうが、どうもうまく、口が回らなくなってしまうのだった。

臆病な自分。今まではそれが当たり前だった。椿と話をして、良太の外見が変化して、いかに自分が情けない存在か、理解できるようになっていた。

良太の前向きな性格を容姿が更に磨きをかけ、恭介には眩しく映った。

（とにかく今は何も考えるな）

恭介は立ち上がりジョギングを再開した。

すると、後ろの方から足音がし横に並んだ。

「疲れるね、走るって」

良太だった。暗くて顔はよく見えないが、

「よくここがわかったね、良太君」

「だって、恭ちゃんの家に行ったからね」

「そっか」

それから二人は並走した。

しばらく走っていた良太だったが、

「ごめ、僕には無理」

そう言って弱音を吐くと、立ち止まった。

「ここで待ってるから」

恭介は片手を挙げる。

恭介が一周し戻ってくる頃には、良太は自動販売機でお茶を買って、自分はオレンジジュースを買った。

良太を待たせて悪いとも思ったが、すぐにやめてしまっただけはジョギングの意味がないので、数周土手を回ることにした。

恭介は息を深く吸い込む、ゼエゼエと喉が鳴った。肩に力が入り、フォームも崩れてきた。普段使っていない筋肉は悲鳴を上げている。良太は恭介が走ってきたので手を横に出した。しかし恭介にタッチする余裕はない。

一周、二周、三週目になって異変は訪れた。

ゼエゼエと喉を鳴らしていた恭介はそれがヒューヒューと高音で鳴っていることに気づいた。歯を食いしばり、何とか街頭がある良太の傍らまでいくと、背を曲げた。

「おつかれさま」

良太は恭介にお茶を渡す。

返事をしない恭介。

「どうしたの？」

良太は恭介を覗き込んだ。顔を背けるがすぐに気づいた。息を吸い込むと同時に顔が震えているのだ。

「恭ちゃん！」

良太は慌てて背中をさするが何の効果も現さない。

「どうすれい？ 僕どうすればいい？」

「ベットの棚に、吸入気が……あるから……」

恭介は苦しそうに途切れ途切れ言った。

「それを持ってくればいいの？」

恭介は頷いた。

良太は全速力で恭介の家へと走った。

心配そうに恭介を見つめる良太。

今では呼吸も収まりベットに上がり腰掛けている。

良太は吸入器を取りに戻って、恭介が使うまで気が気ではなかった。

徐々に呼吸は整って、二人は部屋へと戻ってきたが、その間終始無言だった。

「俺、喘息持ちなんだ」

「いつからなの？ どうして教えてくれなかったの？」

矢継ぎ早に尋ねる良太。

「三歳からで小学校二年生くらいになるまで、まともに学校には行けなかった。いつも体育の時間になるの憂鬱で、マラソンのたびに見学してるとみんなに白い目で見られるし、それから、ぎりぎりまで耐えるようになって、誰にもこのことを話せなくなった」

恭介は良太と顔を合わせないようにしている。

「それで恭ちゃん欠席が増えたんだ……」

良太はショックだった。自分は恭介を救うと言いながらも、結局恭介の悩みすら訊き出すことができていなかったのだから……。

「俺、ごめん……」

「謝るのは僕の方だよ、恭ちゃんの苦しみを知らなかったから」
静寂が二人を包んだ。

「寝るのが怖い」

「どうして？ まさか寝ると喘息がでちゃうの？」

「夜中から朝方にかけてよく発作が起きるから」

「今日は僕が恭ちゃんが眠るまで起きてるから、安心して、発作も大丈夫だよ」と

「良太君に悪い……」

「いいんだよ。僕恭ちゃんにやっとかできる、その準備ができたと思うんだ。駄目だって言っても無駄だよ」

良太はそう言って笑った。

「ゲームしよう」

恭介はそう言ってゲーム機を引っ張り出して、電源をつけた。

良太は横に座りコントローラーを握る。

恭介の中から良太へのよそよそしさは、もう感じられなかった。

ギンガムチェック

隆はいつもの時間に、珍しく真紀から電話がかからなかったの
で、朝から携帯電話を操作している。

そんな姿を見て松尾は言った。

「今日は雨か……隆がらしくないことをして、それこそこそと」
「うるせえ別にいいじゃねえか」

「悪いなんてたれもいってないぞ」

と、松尾は隆の様子を探った。どうやら今日は機嫌が悪いらしい。
隆は気分屋な所があり、小さなことに松尾もこだわらない主義な
ので、友達として二人はうまくいつているのだ。

二人は校門を抜けて生徒用玄関にさしかかる。

ちょうどそのとき山中椿が横を通り過ぎ、

「おはようっす！」と、松尾が元気よく挨拶をすると、
椿も軽く手を上げた。

その様子を横目で隆は見ても、話しかけようとはしなかった。

「土曜だし、どこか遊びにでも行くか？」

と、松尾が言ったので、隆は、

「まかせるわ」

と、やる気なく返した。

「じゃあ、フルハウスでも行くか」

「そうだな……久しぶりにマスターとセッションでもしますか」

隆はやっと普段の調子を取り戻し、教室に入った。

学校も終わり生徒たちは三々五々と帰宅して行く、

隆は携帯を片手に、松尾とともに校門を過ぎようとしている。

その少し後ろには良太が、話す機会を探りながらついて行く。椿
もこの後噴水公園集合をかけているので、良太と恭介からは多少距
離があったが、四人を視界に捕らえながら歩いている。

交差点に隆たちがさしかかると、隆の表情が驚きに変わっていった。

電信柱の横に真紀がサングラスをかけ、ライブのときのギンガムチエツクの服装で隆を待っていた。

「今日は遊ぶのやめておくか」

と、松尾は言った。

そんな声も無視をして隆は小走りで、横断歩道を渡ると真紀の腕をつかんで言った。

「おまえ、アリエネエよ。こんな所で何してんだよ」

「隆君を驚かそうと思って、待ってた」

「みんなに見られるだろ！」

と、隆が言っていると、真紀は至って普通に。

「見られて悪いようなことしてないし」

松尾、良太、恭介、椿、ライブに来た人は、当然そのインパクトのある格好ですぐにあのときのと合点がいっただろう。他のクラスの者たちや、違う学年の生徒まで奇異の眼差しを向けている。

良太は、今日もバンドの件で、隆に話しかけようとしたときに、隆がちょうど走り出したので呆氣にとられた。恭介も同様である。

椿は顔を背けるようにして、交差点を渡った。松尾はそんな椿を追いかけていく。

隆は、恥ずかしさのあまり興奮した様子で、

「いいから来い！」

と、言って、真紀を引っ張るように歩き出した。

道路を渡り、市民体育館横の間道に入った。

「ちょっと待って、そんなに急がないで、寝てないし、飛行機とタクシーでもつくたきた……どこかで」

「来るなら来るって言えよ！」

「来たよ」

「今言ってもおせえよ！ みんなに誤解されたな。ライブでナンパした女と付き合ってるって」

「どうでもいいじゃない、そんなこと。それより、疲れたし、おなかすいた」

隆は興奮を抑えるように半拍置いて、
「わかったよ、とりあえず予定通り、知り合いが働いている喫茶店に向かう、まったく……」

二人は、しばらく歩いて、モスグリーンの外壁でフルハウスという看板が出ている喫茶店に入った。

鈴の音が店内に流れると、六十代前後の白髪混じりのマスターが奥からやってきた。

「タカシじゃないか、元気にやってたかい」

「久しぶり、マスター」

隆はそう言っただけで空いている席に座った。

店内は広々としており、小さなステージまで設けられていた。

店のアンティークな調度品を引き立てるような音楽が流れている。

「雰囲気いいね、ここ」

真紀は辺りを見渡して言った。

「だろ。ま、親と仲がいいからな、ここのマスターは、それで俺もよく来てる」

「ステージがあるよ」

「夜になると、渋めな老人達が集まってライブやるんだよ。俺もたまに参加する」

「本当、隆君っていろいろセンスいいよね。何人女の人泣かせたの？」

「おまえ俺が遊び人だと思ってるだろ」

「違うの？」

「ちょうど、マスターがやってきておしほりを置いた。」

そのままカウンターのの中に入りそうだったので、

「マスター、なんか食べる物作って」

「おや、めずらしい。注文するのかい」

「今日はだべってるだけじゃないから」

隆は笑いながら言った。

「紹介して？」

真紀は不服そうに言った。

「こいつは真紀、年齢や詳しい住所は知らん。東京に住んでる、社長令嬢らしいよ」

と、隆は言った。

マスターは軽く笑いながら、

「もしかして、声でもかけたのかい？　めずらしいな、タカシもそんなことするんだな……しかし君も災難だったね。涼子の息子だから口が悪いからね、コイツは」

「隆君って遊び人じゃないんですか？」

真紀はおしぼりで手を拭きながら言った。

「とんでもない。椿ちゃん以外、女の子連れてきたことないからね」と、マスターは真紀に言うてから隆の顔色見た。

「椿ちゃんって？」

「別に……」

「あれから長いね、隆」

と、マスターは言うて、隆が怒りだしそうに見つめてきたので、「おっと、私は何か作ってくるよ。聴きたい曲があったらリクエストして」

と、言うて奥へ向かった。

「ねえ、隆君、椿って誰？　どういう関係？」

「別に……クリスマスライブのときのギター担当のやつ」

隆が吐き捨てるように言うて、

「なるほどね、特別の人か」

真紀は揶揄するように言った。

「真紀、しつこいぞ」

「ごめんね、喧嘩の原因は何かとか、そんなことは聞かないから」
そう言うて真紀はつくつくと笑ってから、壁にある写真を見つめた。

「これってもしかして、お母さん？ あ、お父さんって言った方がいいのかな？」

真紀は古い写真に写る、ちょっと目が鋭いポニーテールの女性を見て言った。

「それ涼子だよ。やな目つきしてやがる」

「似てる似てる。じゃあ、この横にいる人がお母さん？」

「うん、涼子が睨んでる人な」

そうこう言っているとマスターが軽食をお盆に乗せて、

「こんなものしか出来なくて、ごめんね」

と、言った。

「いえいえ、すごくおいしそうです。いただきます」

二人は料理に舌鼓を打った。

食事を終えしばらく談笑してから喫茶店を出た。

市民体育館まで歩いて、バイクに乗った。

真紀はギンガムチェックのヘルメットと自分をしきりに見て、

「なんかギラギラしてるよ」

と、楽しそうに言った。

「このメットがあつたから、真紀に反応したんだろうな」

隆はキックペダルを踏みながら言った。

何度もペダルを踏むが、エンジンはかからない。

「いつも調子悪いの？」

「これが当たり前、旧車だからな」

「きゆうしゃ？」

「だから、昔のバイクで、おまけに並行輸入だから、ウイinkerな
くても違反じゃない」

「じゃあこれ、本物なんだ」

隆が蹴り疲れて、

「押しがけでもするか……」

と、言っているとエンジンはかかった。

真紀が後ろに腰掛けるのを確認して、バイクは走り出した。大通りへ出て、学校を迂回するように駅に向かった。

しばらく市内をぐるりと回り、隆は自分の家を教えたりしながら、真紀が行きたいという場所のリクエストにも応じた。

それから隆は目的地に行くために海岸線に続く道路に出た。

潮の香りが漂う海辺は、手でつかめそうなほど近くだった。

ゴツゴツとした岩場にカモメが止まっている。

錆びたガードレールの横を、黄色い帽子を被った幼子たちが、規則正しく列を作って歩いている。

頭巾を被った老人は、海に向かって背伸びをしている。

バイクは軽快に走り隆は、およそ三十分おきにバイクを止めて、休憩を入れた。

バイクは、実際に乗っていると疲れる乗り物なのである。

港には小舟が止まっている。

「気持ちいい、最高！ 都会じゃちよつとこんなことできないよね」と、真紀はヘルメットを脱いで言った。

「俺は疲れるけどな」

隆はそう言つて、バイクをスタンドで固定して、その上に横になるように座った。

「歌うようになったきっかけは何ですか？」

真紀はおもむろに言った。

「何だ、いきなり？」

「いいから答えて！」

「電話で言っただろう……」

「もう一度」

「土手だったかな、母さんが言うには二歳のときだったらしい。今思うと子供心にこうすれば親が喜ぶって思ったのかな」

と、隆が遠くを見て言った。

「なるほどね。ありがとう」

「おまえ、金持ちだろ、どうしてこんな田舎まで来て、俺といるん

だ？ 他にもいるだろ、友達とか家族とか」

隆がそう言うと、真紀は唇を噛んで言った。

「強いて言うなら、現実逃避かな。ほら、どうしようもないときってあるでしょう」

「今がそのときなのか？」

「もう、いいから行こう。時間は有限だよ」

「わかったよ」

隆がバイクに座り直して、真紀が後ろに乗るのを確認すると、バイクは走り出した。

バイクは海外沿いをしばらく走り、

瀬会い海岸公園という標識がある道に入って行った。

大きさを表すとグラウンドくらいはあるだろう、駐車場があつて、その奥にはログハウスが何軒か建っていた。

隆はバイクを止める。

「ついたぞ、今日の最終目的地」

と、言つてスタンドを固定すると、砂浜の方へ歩き出した。

「凄い、綺麗な海」

と、真紀も言つて、小走りに隆を追いかけた。

びっしりと白い砂が海岸にあつた。

隆は石段に腰を下ろした。その隣に真紀も腰掛ける。

夕日が水平線に落ちようとしている。

打ち寄せる波、キラキラと銀色に輝いている。

「一人でもたまに来る」

「椿ちゃん？」

隆は真紀をにらみ、

「あいつとも来たことある」

「そっか。寒いけど、来た甲斐あつた、ありがとう」

「別に礼を言われるほどでもねえよ、遠いところからわざわざ来てるんだろ」

真紀は隆の横顔見て、笑った。

「質問！」

隆は嫌そうに眉を寄せた。

「詞を書くときはどんなときですか？」

「辛いことがあって、それがちよつと落ち着いたとき」

隆がそう言っているときに、真紀は隆のモッズコートのポケットに手を入れた。

「おい！」

と、隆が言ったが、無視をして話しを続けた。

「凄い悩みがあつて、それでも前に進まないと駄目だつてときは、隆君ならどうする？」

「だから、その悩みを打ち明けるよ」

「やだ、本質でいいから答えて」

「目を閉じて前に進むしかないだろ、回りが見えなくて、つまづくかもしれないけどな」

真紀は隆の横顔じつと見て、それから海を眺めた。

「この上に展望台あるけど、どうする、行くか？」

真紀は立ち上がり、

「行く行く！」

と、答えたのだ。

木立に囲まれた一角に細い通路があつて、その先に開けた場所があった。

二人はゆつくりとそこを登つて行つた。

木々の間には落ちた椿の花が地面に散乱している。

慰霊碑が高くそびえたち、隣にはお手洗いがあつた。

その奥に、コンクリートの建築物があつて、その下の階はカーテンが閉じきつていた。

隆は建物の横に取り付けられた、階段を上がる。

真紀も後ろからついてきている。

二階に上がると広さ的には四畳ほどの空間があつて、無骨な大きな双眼鏡が二つ並んで立っていた。

展望台から下は大海原が広がっている。所々に明かりがあつて、それがかろうじて船だと判別できた。

真紀は壁に手をつけて遠くを見ている。

「隆君って本当は遊び人でしょう」

と、からかうように言った。

「そんなことねえって」

「そのルックスで、この雰囲気になてられて拒否反応を示す女の人、あまりいないと思うな、わたし」

「はいはい、ちよつと大人だと思つて、俺をからかつてんだろ」

「ちよつと待つて、私が興味半分で君に接していると思つてる？」

「じゃあ、どうして？　ちよつと歌がうまくて、面白いつて冷やかしてただけだろ」

すると真紀は隣にいた隆の手を握った。

「何する！」

隆はうわずつた声をあげた。

それでも真紀は離さない。

「いいから……変なことはいないから、お願いよ」

真紀は懇願するように言った。

「おまえ、変だぞ、落ち着きないし……現実逃避だつて言ったな、俺はおまえの餌か？」

「そんな隆君にまたまた、質問です！」

「やつぱりこいつおかしいよ。人の話聞いてねえし」

「今日わたしが急に來て、緊張していますか？」

「してねえよ、ボケ！」

隆が強く言つと、真紀は笑い声を上げた。

次第に夜が深くなる。辺りは薄暗くなり始めている。

「人生の参考になりました」

真紀はそう言つて隆の手を力強く握った。

「何が人生だよ。大げさだな」

「あのさ、私のこと何があっても嫌いにならないでね」

隆は手をほどこうと引つ張ったが、真紀は離さなかった。

溜め息について隆は言った。

「何があるかしらねえけど、毎日電話かけてくるやつが、急に音沙汰なくなったら、心配する」

真紀はクスリと笑って、

「ありがとうね。これだけは言っておくけど、金持ちの道楽じゃないから、ここに来るのもね。若い男遊びに田舎の方が都合がいいとかね、そんなことないからね」

「おい！」

隆がいちいち反応するので真紀も面白がっている。

首を左肩に傾け、隆に寄り添うようにする真紀。

「置いて帰る！」

と、隆は踵を返したそのとき、

真紀は隆の背中に両手を回して抱きしめた。

放心しする隆。

「よし、このときのことを思い出して乗り越える。ごめんねありがとう！」

と、真紀は言っ自分から離れた。

指で目元をすくいながら、

「ごめんね、いきなり。今日はほんとうにありがとう！」

そのとき、隆は抱きしめられたということが頭の中で駆け巡り、真紀の震えるような声に気づいてはやれなかった。

黒いシンデレラ

隆は松尾を避けるように、時間を少しだけ早め登校した。

おかげで松尾には会わずに教室に入ることができたが、

仏頂面でベランダから外を眺めていると、校庭からニヤニヤとした顔つきで階段を登ってくる松尾が見えた。

「めんどくせえ……いじられネタだろ……」

隆は席に戻って寝たふりをした。

昨日、時間がぎりぎりだったために、駅まで急いで戻った。

駅にはついたが、電車よりも車で空港まで行った方が早いこのことで、真紀はタクシーに乗った。

隆は抱きしめられたときの、衝撃を引きずって言葉少なめだった。ついたらメールをするといっていたので、朝携帯を確認したところ、「本当にいろいろごめんね、しばらくは自重するね」というメールの内容だった。

どう返事をしていいものかわからない隆は、携帯電話を時折開いては閉じていている。

「社会的に抹殺されそうな、恋愛に励んでいる隆、おはよう」

松尾は隆の首をつかんで言った。

「うるせえな」

「おまえはわかってない！」

「だからあいつは、金持ちで現実逃避をするために、田舎に時折逃げてくるんだって、こっちが地元らしいが、親も都会に住んでるから行くところねえんだろ」

「はいはい、普通は気をつかってスルーするんだろうが、俺はあえて聞こう！ 昨日は何をしていた？」

そこで隆はがばっと起き上がり、

「おまえな……自称アウトローだろ、そんな話に興味持つか」

「あ、都合が悪いときには俺のアウトローを認めてるよ」

「とにかく黙れ　な」

「で、話は変わるが、昨日はあのあとどこに行った？　フルハウスに行ったまでは知ってるから、そこはとばしていい」

松尾は隆の肩をバンバンと叩いて言った。

「話変わってねえし、どうして知ってるんだよ……」

「や、俺も行くとしたから、後をつけたわけじゃないぞ」

「もうどうでもいい……ゼアイ行ったんだよ」

「ほー、あそこは綺麗な砂浜に展望台まであるな」

「だから、何ていうか、相談されたんだよ、これ、本当」

「じゃあどれが嘘だ？」

と、二人が話しているうちに担任の村山が入ってきて、

「先生！　俺今日、ヴェルヴェッタアンダーグラウンドの秘蔵ビデオ持ってきたよ」

と、松尾は言った。

「それはすごいな　」

「今日は何もなし、適当に見てるわ」

隆はやる気なさそうに言った。

「先生こいつ！　音楽より女に走りそうです！」

「いちいち言うな」

隆と松尾は同じような趣味を持つ担任の村山と、日曜日は事前に打ち合わせて学校の視聴覚室に集まって、各自持ち寄ったビデオやレコードやCDなどを楽しんでいる。

松尾が筆頭になってこの同好会を、発足したのは言うまでもない。

村山はロックやパンクの歴史に詳しい。

一応は同好会という形をとっているが、毎週あるわけではない。視聴覚室に集まって、松尾がビデオを村山に渡す。

「いい加減バンドのヴォーカルとして、定着した方が曲作りも上手くいくだろうに」

村山は隆に言った。

「クリスマスライブのこと先生聞いたぞ」

「また松尾かよ……」

「おまえには才能がある」

村山はそう言いながら、ビデオデッキにテープをセットしている。
「先生こいつまた誘われてるんですよ、えっとB組の羽柴だっけ？」
「いちいち報告するな」

「何か問題があるのか？ 羽柴良太だな、彼は最近変わったな。先生たちの中でも評判になってたぞ」

「それ先生！ こいつのせいです！」

松尾は手を挙げておおげさに言った。

「それはまた、どうしてだ？」

「見た目から直してこい！ 話はそれからだ！」

松尾は隆の真似をして言った。

「アリエネエ、俺そんなやつじゃねえ」

「でも、悪くなったわけじゃない、先生よくわからないが、羽柴はパツとしたな」

笑いながら村山はそう言った。

「で、バンドには入るのか？」

村山は松尾が聞けないような肝心ことを隆に訊いた。

松尾はじつと隆を見ている。

「俺はもう人前では歌わない」

ぼそりと隆は言って、

「隆が言う情熱ってやつは持つてると思うぜ！ 何せあそこまでして見せたんだからな」

「いいから先生ビデオ見よう」

と隆が言うところ以上追求するのも悪いと思ったのか、村山は再生ボタンを押した。

隆は学校を出ると一人で、フルハウスに向かった。

何だかわからないが、むしゃくしゃしてるのだった。

扉を開けるとマスターが嬉しそうに、

「二日連続で来るなんて珍しい。前は良く来てたが」

隆はカウンターに腰かけて、うつむいている。

「何かさ、マスターって周りのやつがみんな希薄に見えたときあった？」

「いきなり難しい質問だ、タカシ」

「どいつもこいつも同じような格好して、同じような考え方で、俺、そういうの見てるといやになるし、あれが好きだとか、これが好きだとか言っても結局は、そんなものかよみたいに……」

「若いなあ……タカシの言ってることは理解できる。でもな、人と違う価値観を持って、それを愛していない人が駄目だってわけじゃない、わかるかい？」

「どうしてだ？ 何度かバンド組んで、息苦しいったらなかった」

「それで喧嘩して辞めるって、椿ちゃんがいっつも困ってたな」

マスターは髭を触りながら笑っている。

「先が見えてるし無駄だから、気持ちさえあれば努力もするけど、それすらない」

「宏大が死んでしまってから、おまえも変わった。タカシはどうして歌う？ こんな質問もしばらく誰からもされていないだろう」

「どうしてかって言われたら……歌わずにはいられないから、そうとしか答えられない」

「涼子は元気にしてるか？」

しめっぽくなつた雰囲気、変えるようにマスターは言った。

「毎日うるせえよ」

「おまえ、涼子に歌を聴かせたことあるか？」

「あいつにそんなのが、わかるわけがねえ」

「そう思ってるのはおまえだけかもしれんぞ、タカシ」

マスターは、そう言っ、ちようど客が入って来たので、対応に追われた。

接客が落ち着いたのを見計らって、隆はマスターに手を挙げてフルハウスを出た。

土手の石段に座り歌っていた隆だったが、どうにも調子がよくないのではらく川面を見つめていた。真紀から三度目のメールが鳴った。「怒ってる？」という内容だった。その前は「ごめんね」だった。携帯電話のメモリーのギンガムチェックという欄のボタンを押した。

暫くして電話は繋がる。

「もしもし、私真紀です」

と、受話気口から聞こえたので、

「おまえ、何度もしつけないよ、怒ってねえし今まで通りでいいから」と、隆が言うのと遠い声で、

「真紀さん、怒ってねえそうです。よかったですね」

「舞ちゃんちよつと待ってちよつと待って、勝手に電話取らないですよ」

雑音がして、

「ごめんね隆君、今は気にしないでいいから」

「だから、昨日はいろいろあったけど、怒ってねえし、今まで通りでいいから、おまえもあまり考えるなよ」

「ありがとう、私緊張してる」

「は？ 昨日は会ってても普通だったろ」

「もう駄目、手とか震えてる」

「なにやってんだよキモイな……とにかく、そういうことから、じゃな」

隆は電話が終わると瞳を閉じて、練習を再開した。今度は集中力が途切れることはなかった。

隆が帰宅するとテーブルには恵が作った料理が既に並んでいた。バッグを置いて、腰掛ける。

涼子は酒の肴を食べながらビールを飲んでいる。

恵は柳眉を上げて台拭きで涼子のこぼしたビールを拭いて、空咳をし、

「いただきます」

と、言った。

「いただきます」

隆もそう答えて夕食が始まった。

隆が箸を、動かそうとすると、

「バカ息子、フルハウス行つてたらしいな、電話あつたぞ……たまにはあそこに顔だしてくれ、俺のかわりにな」

と、言つて涼子はビールを片手に豪快に笑っている。

「マスターなんか言つてたか？」

と、隆が言つと、

「たまには涼子も顔だしに來い！ 怒られたわ」

と涼子が言つと隆は小さく笑つた。

「やけんメグがいったやん、今日はフルハウスでご飯食べよつて」

「ここからだと遠いだらうが」

「メグも樂できるし、マスターと話しできるやん」

と、恵は口をとがらせて言つた。

「來週行くか、しかしあの睨んでる写真どうにかならんのか？」

と、隆が言つと、

「それ、俺のことじゃねえよな」

と、涼子が言つて箸が隆の眉間に直撃した。

俺から電話したのつて初めてだよな……。

隆は入浴から出てトランクスいっちょうで、そんなことを考えていた。

涼子はビールから焼酎に切り替わっており、顔は赤くなっている。

恵はテレビを見ていた。

テレビ番組は歌番組をやっていた。それを必死に見つめる恵。

「おまえまた、こんなつまらんもの見てる」

と、隆が言うとは恵はキツと眉を寄せ恐ろしい形相で睨んだ。

隆は気おされ、

「わかった、黙るわ」

と、言った。

「初公開ですよ、それではSAYAさんの登場です」

と司会役の女性が言うつと、

真っ黒いドレスに身を纏った、黒髪のスラッとしたSAYAが登場し女性と男性の司会者と向き合うように座った。

「動いてますよ、本物のSAYAですよ。写真と変わらず綺麗ですね」

と、司会役の男性が言うつと、

「これは凄いことですよ。TV初公開ですね」

「生番組です。SAYAさんが私の隣にいます！」

司会者は代わる代わる、大げさに盛り立てる。

SAYAの後ろには何人もアーティストが控えている。

「本来なら、ここですぐに歌ってもらうのが、この番組の流れなんです、今日は少しお時間を取って、SAYAさんに質問したいと思います」

司会の男性は言った。

「歌うようになったきつかは？」

司会男性はそう言った。

SAYAはおずおずとマイクを持ち上げると、

「土手だったかな、母さんが言うには二歳のときだったらしい。今思うと子供心にこうすれば親が喜ぶって思ったのかな」

フレンドリーな話口調で言った。

「そうですね、二歳凄いですね！ それでは質問を変えます」

恵は画面に吸い付くように見ているので、隆が、テーブルにある食器類を流し台に運ぶ。「詞を書くときはどんなときですか？」

男性司会者から女性司会者に切り替わる。

「辛いことがあって、それがちよつと落ち着いたとき」

と、S A Y Aは言った。

「なるほどそうですね、そういつたときに世に出てくるような、素晴らしい作品が思いつくんですね」

「それでは質問を変えます」

男性司会者は、マイクを持ち直すようにして言って、更に、

「今日、この番組にでて、緊張していますか？」

そう続けた。

「してねえよ、ボケ！」

隆はテーブルにあった醤油差しを倒した。

それからテレビ画面を見つめて、

真っ黒いS A Y Aの格好やバックにいる他アーティストや、司会の二人が視覚から消えて、S A Y Aの顔、顎から上の部分だけがぼやけて見えた。

現実とは思えなかった。そこに映っているS A Y Aはまぎれもなく、昨日隆に抱きついた真紀だったのだ。

「オラ！ バカ息子テーブル拭きやがれ！」

と、涼子が怒鳴ろうとも聞こえてはいなかった。

舌打ちをして、涼子は布巾でテーブルをふいた。

司会の二人は真紀の言葉に呆気にとられて、ほんの少しテンポが遅れる。

「S A Y Aさんはジョークがうまいですね。ツツコミですか」

と、男性司会者が言うと、後ろに控えているアーティストから笑いが漏れた。

「それでは歌の方に入ってもらいましょう。S A Y Aさんよろしくお願いします」

女性司会者が言うとS A Y Aは立ち上がった。

S A Y Aは大勢観客が詰まった場内、はりばてのセットを見渡した。

ゆっくりとした足どりで階段を登って、マイクがあるその場所ま

で行くと瞳を閉じた。

スタッフが早速カンペを出す。

「S A Y Aさんは閉じないでください」

と、一度目を開けてカンペを見てもS A Y Aはまた、目を閉じた。アーティストマネージャーである舞に、初めてだからあてぶり、口パクでいいと言われたがS A Y Aは、「初めだからこそ、それはできない」と断ったのだ。

バンドの演奏は始まった。

時間はコマ送りのように過ぎ、一秒ごとに心臓の鼓動が早鐘のようになり高まった。

大型スクリーンはS A Y Aを投影している。

今だ、とS A Y Aは口を広げて、目を開ける。

観客と視線が合い、バンドの音が何倍にも大きく聴こえた。

S A Y Aは伴奏が終わっても歌い出すことはできなかった。

体が石のように固まり目線まで凍りついたように動かない。

後ろを振り向いたとき、S A Y Aは何かとても大事なものが、こぼれ落ちたような気がした。

忘れていた震える息づかいが聴こえる。

観客から遠ざかるように、一歩前へ踏み出した。

それからは驚くほど早かった。

S A Y Aはステージを走り、逃げ出したのだ。

恵は顔を苦しそうにしかめて、

「どうしよう……」

と、涙を流している。

隆は未だに現実ではないような気がして放心していた。

恵の泣き声で、我に返ると、

「大丈夫、あいつは逃げても、逃げ切れるような性格してねえから、元気だせメグ」

と、胸を押さえ言った。

涼子はその光景を肴に酒をあおった。

奇妙な夜だった。

もう寝る時間だというのに、恵はニュース番組を見ていたし、隆はいつもならすでに部屋にひきこもってる時間なのに、時折、携帯をさわりながら、テレビ画面をチラチラと窺っている。

涼子は普段なら隆にちよっかいを出すというのに、静かに酒を飲んでいた。

音楽番組はあのと、CMが入って、S A Y Aの次に歌うアーティストが一曲多く歌っていた。

「メゲ、そろそろ風呂に入れ」

と、涼子が優しく声をかけるが、聞いていない。

「隆、おまえもなんか言ってやれ」

「恵……好きなときに入れ、おにいちゃんは今日はおまえの味方」と、隆が言うと、

「めずらしいこともあるな！ こりゃ明日は雪だな」

と、豪快に笑いながら酒をあおっている。

妹は泣きはらした目をこすり、浴室に向かう。

もう日も変わろうとしている。

するとそのとき、チャイムが鳴った。一回、二回と続けて、

隆は跳ね上がるように立ち上がると、

「俺が出る！」

と、言って玄関に向かった。

「こんな時間にどこのどいつだ、非常識なバカは！」

酔っている、涼子も玄関に向かおうとしたが、

隆が立ちはだかり、

「いいから、俺が行くって！」

「一家の大黒柱は俺じゃ！」

揉み合いになっている。

三回目のチャイムが鳴った。

浴室に向かおうとした恵は、この騒ぎを聞きつけ、玄関に向かった。

隆と涼子は玄関でつかみ合いをしている。

そんな状況も無視をし、恵は玄関を開けた。

「待て！ 開けるんじゃないやねえ！」

と、隆が言った。

ガラガラガラと玄関は開いて、

「逃げて来ちゃった」

と、真つ黒い格好をしたS A Y Aが言った。

隆は頭を抱えるようにして、

「アリエネエ！」

と、言った。

恵は言葉も発することができないでいる。

「妹さん？ かわいい！」

と、真紀が言って、

「真紀、おまえ……何てことしたんだ……芸能人嫌いな俺でさえ、心臓が飛び出そうだぞ！」

隆は玄関であぐらをかいて座り込んでしまった。

涼子は、S A Y Aの服や髪を触って、

「ありや」

と、言った。

「ねえ、隆君、妹さん紹介してよ」

隆は頭をかきむしっている。

「ちくしょう！ だまされた俺！ 妹は恵でおまえの大ファン」

「ありがとうね、ごめんね、見てたよね……」

真紀は恵の頭を優しく撫でた。

それから涼子の方を向いて、

「本当に夜遅くにすみません……ここならばれることはまずないと、そう思っただけでした。隆君とは友達させてもらってます」
「まあ、色々ある。気にすんな」

と、涼子が肩に手をかけると、

真紀は恵に抱きついて堰を切ったように泣き出した。

隆は天井を見上げた。

真紀が落ち着いて恵が初めて真紀に言ったことは、
「あの、サンタクロースって私だったんです。だから……初対面じゃないんです」

と、真紀は、合点がいった。

「ライブのね、隆君と私が知り合ったのは妹さんのおかげ？」

「世の中どうなってるんだ……」

隆は天井を仰ぐように言った。

「さて寝るか、おまえらも適当に……」

涼子はふらふらと、寝室に向かった。

「おまえどこで寝るんだ……」

真紀に向かって隆は言った。

「隆君と一緒に寝る。嘘」、

「おまえな……」

と、隆は言っで、立ち上がった。

「もう風呂入るな二人とも、涼子が寝たし……明日の朝入れ」

「うん、おにいちゃん、ありがとう」

と、恵は言った。

隆は部屋に向かって、真紀もそれに続いた。

恵は居間の押し入れから布団を一組引っ張り出して、隆が寝ている、隣に置いた。

それから自分の部屋に入って、布団を持ってきてその横に置いた。

「おい、メグ！」

と、隆が言っだが、恵は涼しい顔をしていた。

綺麗に三つ並んだ寝具の一番左に恵が入ると、その隣に真紀が入った。

「なんか夢みたいや……」

と、恵は言った。

しばらくして疲れていたのか、すぐに寝息がした。

隆はチラッと真紀の方を見て、

「大丈夫か？」

とぶっきらぼうに言つと、

真紀は、

「たぶん……ごめんね……本当に」

と、言った。

「今頃、自分のしでかしたことの大きさに気づいたんだろう。でも、おれんちつてな、常識とかそういうの全くないから、それに関しては氣を使うな」

それから半拍置いて、

「おまえが逃げるなら、俺が前に進むから」

そう言つて隆が布団を肩にかけていると、真紀の腕が布団の中に入ってきて、手を握る。隆は、口を開きかけたが、何も言わなかった。

「おやすみなさい、それと隆君の言葉、代弁するように使つてごめん」

「最後に一つだけ訊かせてくれ、どうして逃げた？」

隆は背を向けたまま言った。

「隆君に会つて壁を感じたし、何より歌以外で自分が認められると思うと悔しくして」

「いいわけだろ？」

「ごめん、テレビに出るのが死ぬほどやだったの……」

「おまえ、今日ここに來て何度ごめんって言つたよ……」

隆はそう言つて振り返りさらに、

「俺が訊きたかったのはおまえの本音。それが聞けたから、もう何も問題はない。おやすみな」

と、言った。

真紀は力強く隆の掌を握ると目を閉じた。

進むということ

帰ってこないと感じるだけで、こんなにもガランとしてしまうものだろうか、小城舞は散らかった室内を無意識に掃除しながら、そんなことを考えていた。

何となくだがこうなることを薄々感じてはいた。しかし懐疑的な思考が絵に描いたように現実になってしまうと、やはり途方にくれてしまうものだ……。

S A Y A が逃げ、舞はマネージャーとしての仕事をまっとうするべく、追いかけて当然のこと止めようとした。

「真紀さん！ 真紀さん！」

二度名を呼んで腕を取ったが、予想以上の力ではねのけられてしまった。

胸が痛んだ。舞は転びてのひらを床につけ後ろ姿を、見つめることしか、できなかった。

こんなときに限って、警備員は役に立たない。主要スタッフの少ない一般の出入り口を走り抜け S A Y A は非常口に向かった。

それからは怒濤のような展開になり、何度名前を呼ばれたかすら覚えていない。

（田舎へ帰るように進めた、私がいけなかったのかしら）

舞は携帯電話をソファアに投げつけた。

真紀のデビューは地元でスカウトをされ、卒業に合わせて上京するという形だった。

当時、父の仕事の関係と重なりうまくいくかと思われたが、真紀は歌手だけをしたいと、無理難題を言って事務所を困らせた。それでも事務所側は押しでいけると思い込んでいたが、契約の段階でもめてしまい、当時のマネージャーと絶縁し、芸能人にはならないと真紀は言い出した。

そこで T Y レコードに所属しアーティストマネージャーとして名

の知れた、小城舞を事務所側が引き抜き、真紀と会わせる。二人は歯車が合ったように親交を深め、アーティストマネージャーとしての垣根を越えて舞は仕事に従事することになった。

事務所側は真紀と対話を進め、三年間はテレビ活動は一切行わないということまで一致した。渋々ではあったが、舞の説得も大きかった。

そして、名字だけ芸名の状態から、S A Y Aと改名し、なるべく自分のスタンスで、作詞とCDの得点としてつく写真集の構想を考え、それを総括し曲を提供していったのが舞だった。

写真集の価値を高めるためにS A Y Aの肖像権は異常なまでに確保されていた。

田舎に帰郷するというきっかけは、その異常な警備体制が招いたといっても過言ではない。真紀自信が契約が切り替わるということで周囲に敏感になってしまったのだ。

そこで舞は警備をしない方針で田舎へ帰郷することを真紀にすすめた。

すべてが裏目に出てしまった。

音信不通、行方不明、失踪といった文字がワイドショーなどでは既に踊っていた。

隆は携帯音楽プレイヤーを片方の耳へずっと押し当て授業中もS A Y Aの曲を聴き続けていた。

なぜそうなったかは朝の恵の一言から始まった。

「おにいちゃん、これS A Y Aの曲、評価とかそんなことじゃないんで。知らんとだめやけん」

と、恵は言つて隆に愛用のプレイヤーと写真集を渡したのだが、当然隆は、一度嫌な顔をし、思い直したようにそれを手にした。

S A Y Aとして真紀として身近すぎて評価どころではなく、しかし、着眼点はいいような気がした。オールディーズな曲調とS A Y Aの声は合っていた。

机に入れてある教科書よりも幾分小さな写真集をめくる。

妙な気分なのだろう、複雑な顔をしている。それもそのはず、SAYAは真紀であり真紀ではないのだから。

教卓に立って朗読をしていた村山は下を向き、いかにも授業を聞いているという隆を指名した。隆は視覚と聴覚を半分以上奪われてしまっているので気づかない。

村山はあきれかえり、やおら近づき、写真集を机から引つ張り出し、

「隆はこんな趣味もしてたのだな」

と、言った。そしてイヤホンを取って、

「これはJPOPなのだ、珍しい……にしても、今は授業中だぞ！」

と多少語気を荒くし、村山は教科書で軽く隆の頭を叩いた。

写真集の開いたページのSAYAはそのちよつと、大胆な姿だったりしている。

クラスから笑いが漏れる。

一番先頭に立って大笑いしているのは、松尾で椿に至ってはギョツとしている。

村山は没収すると、授業を開始した。

昼休みになると早速松尾が、隆の奇行に言及している。

「あの隆がな！ 最近のおまえは変だぞ」

と松尾は言って笑っている。

隆は机を寄せながら、

「恵が押しつけたんだよ！ しかたねえだろうが！」
と言いつ返す。

「おまえはそれでも絶対に、メグちゃんの言うことなんて聞かないだろ。や、音楽の話で人の意見なんて耳を貸すわけがないぞ」

隆は言い返せないでいる。

昼食の用意を済ませると隆は松尾に、

「俺ちよつと用事あるから！　じゃ」

と、言って逃げだした。

「おい、逃げるな、逃げるな！」

松尾は腹を抱えて笑っている。

「アウトローな俺もシヨックが大きいぞ！」

と、教室から出て行く隆の背中に向かって言った。

職員室の扉を開けると村山と目が合った。

隆は村山のもとまで行って、

「先生、あれ妹の大事な物だから返してほしい。授業中は絶対に聴かない」

と、言って頭を下げた。

「そうか　、おまえはふまじめだけど筋はいつも通ってるからな
今回だけだぞ」

村山は引き出しを開けて、隆に携帯音楽プレイヤーとブックレットを返す。

他の教師がチラッとそれを見て眉をひそめたが、温厚な村山は珍しくにらみ返す。

教師はばつが悪そうに新聞を手を取った。

「ありがとう」

隆はそれを抱えて職員室を出て行った。

教室に戻ると良太が廊下で隆を待っていた。

隆に気づいて、一瞬申し訳なさそうにして、

「あの　」

と、いつものように言ってきたので隆は、

「俺、食いながらいいか……そうか、おまえもこっちで昼すませるよ」

と、言った。

「え？」

と、訊き返す良太。

「いつも俺は食べながら話聞いてるだろ、おまえ昼休み減るだろ」
隆がそう言ったので、

「ほんとに、一緒にいいいんですか？」

「どうして嘘付く必要があるんだ？」

「あの、恭ちゃんも連れてきていいですか？」

隆はうなずくと教室に入っていた。

しばらくして二人は教室に入ってきたが、良太は何度かきいているので慣れているのだが、恭介の方はおどおどとしている。

隆は、すいている席を指さして、

「その机寄せろよ」

と言った。

「でも僕たち、立って食べられますから」

「俺がおちつかねえんだよ、なあおまえら、ちょっといいだろ」

隆は近くにいた、机の主の生徒に言った。

「別にいいよ。俺らどうせ昼休みは体育館だしね」

と、言って、二人の生徒はそのまま教室を出て行く。

良太はその後ろ姿を見て、

「きれいに使いますから！」

と、大げさに言ってる。二人は笑いながら出ていった。

隆と向かい合っている松尾は、腕を組んで何やら考え込んでいる。

良太と恭介が机を寄せて弁当を広げ食べ始める。

良太はワインナーを手にとって、につこり。とても幸せそうだ。

恭介は物静かに一人分よりは多めのその弁当を片手に持った。

そんなときだった。隆がごく自然に風が窓辺から流れるように言
ったのは、

「俺、バンド入ることした」

良太はワインナーを落とし、恭介は固まった。

そして松尾が大声で、

「じゃー！」

と、一番無関係にも関わらず喜んでいる。

椿はやりとりを盗み聴きしており、

「よっし」

と、言ってこぶしを握った。

発起人である良太が一番遅れて、

机に落ちたウィンナーをフーフーフーと息を吹き付けながら、口に入れて飲み込み、モゴモゴとやって涙ぐんだ。

「よかった……毎日毎日にここに来て今日はお弁当も一緒に、僕…

…僕！」

と言いながら喉を詰まらせ、それに気づいた恭介が背中をさすっている。

「おまえら本当におおげさだな」

と、隆が驚いて言った。

「おまえが一番、これがどういうことか、わかってない。良太でかしたぞ、おまえもアウトローだ！」

と松尾が言った。

「まったくアリエネエ」

と隆が言つと、こっそり聴いていた椿は机に顔をうずめ、目元を手で覆って肩をふるわせている。

「話の腰を折るようで悪いが、ちょっと最近家のことでゴタゴタとしてて、すぐにはいかないぞ、良太、面倒だから登録して」

と携帯電話を良太に渡した。

そこで恭介が立ち上がり、硬い動きと妙に大きな声で、

「俺、橋本恭介です。よろしくお願いします！」

と言った。

隆は立ち上がり恭介の手を取って、

「俺は隆な、よろしく」

と良太と恭介の双方を、見つめながら言った。

ともかく隆がバンドに入った。

「二人は楽器はどうした？ 前は持ってないっていったが……」

「まだ細かいことは決まっていますが、山中さんが言うには」
早速松尾が良太と恭介に対して根掘り葉掘り、質問を繰り返して
いるが、椿の名前が出たときに良太の口を慌ててふさいだ。

隆はそのとき授業中と同じように、片方の耳にヘッドホンを入れて
いたので気づいていない。

良太はわけもわからず、松尾を見返している。それを見た恭介が、
「俺がドラムで良太君がベースがいいと……」

隆はブックレットを広げようか迷っている。

（俺がS A Y Aを否定してどうするんだよ！）

隆はページをめくった。

松尾は横目で隆の行為を確認しつつも、

「なるほど、良い判断だ。だが買うのか？ ベースはともかくとし
て……」

と、言った。

「ですよね……練習も、どうすれば良いんだろう……」

と、言って良太はうなった。

「隆がバンドに入るって決まっても、まだバンドを結成したとはい
えないな」

と、松尾が辛口の意見を言った。

良太は更に追い詰められたが、瞳に力を込めて、

「でも僕たちあきらめません！」

と、強く言った。恭介もうなずいている。

「まあ、俺に考えがないわけじゃない、何もかも一瞬で決まる方法
を知っている。良太！ 恭介！ おまえら情熱ってやつは持つてる
よな」

と、松尾は念を押すように言った。

「俺、うまくは言えないけど、何をしてるときでもチリチリと胸の
中にある」

そこから良太が受け継いで、

「こう変わりたいとか、こうなりたいとか夢見るようなところです

よね、それって」

と、二人で言った。

松尾は腕を組み深くうなずいて、

「それなら大丈夫だ、少し時間はかかるが俺が解決してみせよう」

と、言った。

「本当ですか？」

良太がそう言うつと松尾は威張りくさったような態度で、

「俺様に任せる！」

と、言った。

「よかったね良太君」

と、恭介が言うつと、良太はブイサインを作つて、

「やったねブイ」

満面の笑みで答えた。

丁度そのときチャイムは鳴つて、二人は結局弁当は半分も食べられなかったのだ。

テレビから小さな音が流れ、何度も何度もループされるその映像を遠巻きにするように、眺めている。

チャンネルを切り替えてもしばらくすると繰り返されるその光景を、とても自分がしでかした、ことではないように視界に収めていく真紀。

真紀はワイドショーに映る自分を無表情に眺めている。

逃げ出した前後、まるで大きなハサミにでも切り取られたように、記憶がない。

今でも時折、フラッシュバックのように緊張がよみがえる。

そんなとき舞がいつも口を酸っぱく言っていた、ことを思い出していた。

「真紀さんは自分の感情に疎いんです。回りから見ればただの脳天気に見えます」

舞は肝心なことに限って言わない性格を直してほしいと伝えたか

ったのだろつ。

真紀は考えるのも恐ろしくなったのか、立ち上がった。

この家はどことなく寂しい。隆から広大の話を聞いている先入観から、きているのかもしれないが……。

真紀は居間から隆の部屋に入るとレコードプレイヤーの前に座り込み、しばらく黙考しレコードプレイヤーに針を落とした。

SAYAとしても尊敬しているロックな音楽が軽快に響いた。笑みがこぼれた、この曲は確か……。

真紀は音楽を鳴らしたまま、立ち上がり部屋をでるべく扉を開けようとしたが、アコーディオンドアに仕切られた奥の部屋が気にかかり、そちらを開ける。

雑然とした部屋だった。ランドセル、使い古した教科書、ロックバンドのポスター、奥にはパイプベッドがあった。そのベットは今でも眠れるように布団が敷いてあった。

掃除をしていないのだろつ、物には埃がかぶり部屋全体がカビ臭かった。

そこで真紀はふと気づいた。ここが隆の本当の部屋なんだと。

昨日寝て、普段隆が使っている部屋は生前広大が使っていた部屋なんだと、もう一度レコードがある部屋に急いで戻り室内を確認した。

やはりそうだ、隆は広大の部屋を自分の部屋だと思い込んでいるのかもしれない。

若しくはそれに気づいていて、現実を見ようとしていないかだ。

潔癖に自分の信念を曲げず、大人びている隆。

真紀が芸能人だと知っても、態度を変えない隆。

カリスマも含め 悲しみを知っているからこそ、成り立つのだと。

自分だけがどうしてこんなに不幸なのかと、考えていた真紀は、それがどれだけ甘い考えなのかと思い知った。

くずおれる真紀、

（ごめんなさい、ごめんなさい）
涙がとめどなく流れた。

隆は悪びれもせずに言った。

「おまえ歌下手な」

今までどれだけ切望しても、誰もが、

「そこはちよつと、こう行きましよう SAYA さん」

だとか、抽象的なことで伝え濁されてきた。真紀はやっと直接的にこの言葉を聞いた。

まさか年下の高校生に言われるなんて思ってもいなかっただろう。不思議と穏やかな感情だった。

「ありがとう、私は誰かがそう言って怒ってくれるのを待ってた」
真紀と隆は土手にいて、真紀は隆のモッズコートのポケットに手を入れて隆と歌っていたのだ。

隆は帰ってくるなり、土手に行くと言い出したので、真紀もついてきた。

始めは反対していた隆も真紀がずっと家の中にこもって、テレビを見ているよりはいいと思ったのだろう、外に連れ出した。

恵は変装をしたほうがいいなどと言ったので、隆は余計に目立つとそれを断った。

「変なやつ、下手だって言われて喜んでる。もっと細かいことを言おうか？」

と、隆が言くと真紀は、

「ちよつと待ってちよつと待って」

と言って慌てた。それを見て隆は笑っている。

「今日はこうやって外に出たけど、これが俺の徒歩の範囲を超える
と危険だな」

「SAYA がいるなんて誰も思わないかも」

隆の現実的な提案に樂觀的に答える真紀。

「普通はそうだな。だけど、帰りに駅やホテル、主要施設寄りなが

ら帰ったんだけど、マスコミだらけだったぞ」

「それで、テレビでも地元にいるなんて言ってるんだ」

「おまえ……どうしてテレビ衣装のまま来た」

「無我夢中であまり憶えてません」

「どこのシンデレラだよ」

「でも、空港からタクシーでここまで直通したとき、運転手さんに絶対に言わないでって言質を取ったから大丈夫」

「アリエネエよ、途中で降りて俺に電話するとかしろよな」

「ごめんねえほんとに……」

しめっぽくなってきたので隆は慌てて、

「べ、別に攻めてるわけじゃねえ」

と、言った。

「隆君が私に味方してくれてるように、私も何があっても君の味方」
真紀は目を細め隆を見上げる。

恥ずかしそうに隆は顔を背ける。

「アリエネエ、始めはただの柄繋がりだったのに俺ら」

「ちよつと待ってちよつと待って、ひどいよそれ」

「でも、本当だろ」

二人は笑い、歌い始めた。

恵のはりきりようは異常だった。

夕食はちよつとどこかの料亭でこれを出しても、おかしくないほどである。

隆はため息をついて、

「恵……この人数でこんなに食べられるかと、言っている。

テーブルいっぱいに並んだ料理の数々、

素直に喜んでいるのは、真紀と涼子だった。

涼子は早速ビールを片手にやっている。

それぞれ席につくと、

「いただきます！」

と、真紀が言った。

「召し上げれ」

恵はとても幸せそうだ。

テレビも何もつけていない空間の中が、まるで灯りがポツとついたように華やいだ。

夕食になると、毎日喧嘩をしていた隆と涼子も今日は平和である。

「メグちゃんありがとう、どれもおいしいよ！」

真紀は、うれしそうに言った。

「真紀さんのために朝早くから仕込みをしたけん」

恵はいまだに芸能人が、この家にいるのは信じられないのか、伏し目がちである。

「ありがとうねえ、でも、そこまでしてもらうのも悪いから」

申し訳ささそうに真紀は言った。

「まあたまにはいいだろ、バカ息子の友人（？）は少ないからな！
姫もいっぱいやるか？」

涼子は焼酎に切り替わっており、大げさに笑うと言った。

コップに焼酎を注ぎ、真紀に渡す。

「少しだけ頂きます」

「おい！ おまえ大丈夫かよ」

と、隆が言ったが真紀は少しと言ったのにも関わらず、半分くらいついでであったそれグビグビと飲み干した。

「良い飲みっぷりだ。バカ息子姫もいい大人だ、口を挟むんじゃない！ 明日は俺も休みだ！」

涼子はいつも一人で飲んでいるので、真紀が飲んでいることを快く思っている。

「俺しらねえぞ、どうなっても」

とは言ったものの、真紀の精神的な面を考えても酒くらい飲んで
もばちは当たらないだろうと感じているのだろう、深くは言わない
でいる。

夕食も終わり恵はやおら立ち上がると片付けを始める。

明日の弁当は大層豪華になるだろう。

真紀も手伝うべく立ち上がりかけたが、顔を真っ赤にフラフラと
していて、それどころじゃない。

「ごちそうさまでした」

と、真紀が言うつと、

「お粗末さま」

と、恵みが返し真紀を緊張した面持ちで支えた。

「おにいちゃん、枕と毛布持ってきて」

「なんで俺が」

と言いかけたが、押し入れから枕と布団取り出し、真紀を寝かせている頭の部分に枕を当て毛布をかけた。

真紀が眠りについてから、いつもの日常に戻ったようだった。

しかし隆は自分の部屋から出て、居間で寝ている真紀を見る度に、
ここが自分の家なのか、一瞬わからなくなるのだった。

夜も更けそれぞ眠りについていていた。

朝方隆は、何かにつつかれていることに気づき目を開けた。

「隆君隆君、起きて」

真紀は隆の頬をつついて言った。

「何だよ、何かあったのか？」

と、寝ぼけ眼をこすり隆はかすれた声で言った。

「お話しよう……」

「勘弁してくれよ……何時だよ」

「今ね、四時」

「これじゃあ前と何も変わってねえ、アリエネエよ」

と、隆は言いながらまた、目をつぶろうとするので、真紀は慌て
て、

「ちょっと待ってちょっと待って」

と言った。

とても長い夜が終わろうとしている。

それぞれの涙

相変わらず恭介は土曜の放課後にも関わらず、良太が止める間も与えず、教室から逃げるように退散。

ガックリと肩を落とす良太、毎日のように一緒に帰ろうと、言われている恭介だったがこればかりは、直すのが難しいようだ。

良太はバッグを持って机から一歩踏み出す。

「羽柴君、昨日商店街の書店にいたでしょう」

クラスメイトの津田美咲は、良太の前へ割って入るようにして言った。

良太は顔をこわばらせ力を入れて走りだそうとしたが、コンビニエンスストアのときのように、知らない人ではないし、隣の席の女子である。この先永遠に逃げるわけにもいけないので、緊張しつつも、

「僕、雑誌を見てた」

声は震えているがそう答えた。

「あの雑誌は女の子向けだよ」

美咲がそう言うと、良太は顔を真っ赤にして、

「うん、わかってるんだけど、僕メンズ物じゃサイズ合わないから

……」

「なるほどなるほど」

美咲は腕を組んで良太の話を聞いている。

「オシヤレって難しいね……」

「あたし髪型変えてきた日は驚いたよ。今の方が絶対にいいよ」

「たまに鏡を見ると、変な気分……」

「羽柴君は変態？ 女性ファッション誌を読む、ナルシスト？」

美咲はクスクスと笑いながら言った。良太はあたふたとしている。

「ヘンタイじゃないよ……僕、真剣なんだ」

と、良太が言うと、美咲は数秒うなづいてから、

「そうだ、コートならかわいいかも！」

と、言った。良太も想像したのだろう、表情が和らいで、緊張も次第にとけた。

「その手があったね！　ありがとう津田さん」

そこで窓から校門に立っている恭介を確認して、

「ごめん恭ちゃんが待ってるから僕行くね」

と、満面の笑みで良太は言った。

良太は軽く手を挙げ、走るように教室を出て行った。

美咲は手も挙げ返さず、立ち尽くしていた。

やっと一息ついた、隆はそう思った。

学校が終わると松尾が用事があるから手伝ってほしいと言い出して、市内を引つ張り回された。何が悲しくて男を後ろに乗せて長時間走らされる？　隆はそう思った。

帰ると言えば体を張って阻止してくる松尾を見て隆は薄々、こんなときはクリスマスライブのときのように、裏で何かが起きている。しかし無意味逆らってもどうしようもないのであきらめることにした。

家に帰るより先に土手に向かった。暗くなる前に今日のノルマをこなす必要があったのだ。

奥まった場所、石段に腰をかけて辺りを見渡す、茜色に染まる空は川面に映り、コントラストを与えている。

隆はゆっくりと呼吸を整えて歌い出した。

何度も何度も浮かびは消える広大の姿、それらは隆の歌声をも悲しくさせる。

しんとした空間に広がるメロディの中に足音が混じり、それは近づいて、隆の隣に來るとピタリと止まった。

隆は意に返さない。

それはガサガサと何かを取り出している。

山中椿は携帯音楽プレイヤーの録音ボタンを押して、ギターを鳴らし歌声に合わせていった。

メロディは輪郭をなし空間からまろびでているように響いた。

「久しぶりだな」

隆は歌い終わると言った。

「出会ったときもこんな感じだった」

椿は携帯音楽プレイヤーの録音ボタンを解除して言った。

隆はそのプレイヤーを見て、

「カセットデッキは捨てたのか？」

「捨てない、壊れたから保管してある」

しばらくの沈黙が訪れた。

隆は首からつるしてあるノートに、文字を書き込んでいる。

椿は川面を見つめている。

隆は数行書き込みボールペンを止めて、

「俺が悪かった」

と、こともなげに言った。

隆の言葉を反芻するようにゆっくりと頭を地面に下げる椿。

「毎日毎日、押しかけてごめんね」

椿はそう言つて、半拍置いて息を吐いた。

「あんな俺、おまえには見せたくなかった」

「隆はいつでも俺、俺、俺、あたしはあのととき力になりかった」

椿は下を向いたまま言った。

「俺たちは対等だ、お互い尊敬しあっている。おまえに甘えるのはごめんさ」

隆は大げさに手を広げて言った。

「もう大丈夫？」

椿は伏し目がちに顔を上げて言った。

「今でも歌えば母さんに会えるからな」

「それは苦痛？ それとも」

「苦痛じゃない、苦痛じゃなくなってきたが正しいか」

「あたし何も言わない方がいいのね？」

「これが最後にしてほしい……」

隆は空を見上げた。

「でも不思議ね、あたしたちつてもう長いこと口をきいていないはずなのに、隆とは会話してたような気がする」

隆は椿の顔を眺め目を細め、

「クラスが同じだし、松尾も恵も椿と仲がいいからな」と、言った。

「そうなんだけど……うーん」

椿は納得がいけない様子だった。

そこで隆は話しを変えるように、

「俺バンドすることにしたんだ、椿も一緒にやらないか？」と、言った。

椿は考えるふりをして、

「いや」

と、短く答えた。

「虫がいいよな……絶対しとして」

椿は小さく笑いながら、

「良太を美容院に連れてったのはあたし」

と、言った。

「じゃあ、椿、おまえ！」

隆は立ち上がり抗議した。

「あたしの苦痛に比べたらそんなの」

隆はぐうの音もでない。

「そうだ、月とうさぎのお菓子で許してやるよ！」

「バイトやめたし」

「どうしてだ？」

隆の問いかけに神秘的な顔つきで椿は、立ち上がり、

「やめたから隆と話してるんでしょうバカ」

と、言って隆の頬を叩いた。

隆は顔をしかめたが、何も言わない。

「隆にとっては半年くらいの月日だったわけ？ それくらいに感じ

てる？」

隆は沈黙を守っている。

椿は居住まいを慌てて正して、

「ごめんあたし……」

と、下を向いて言った。

またしても沈黙が訪れようとしていた。

隆は無言のまま椿の頭をなでた。

「今度はおまえがリーダーだ、俺がヴォーカルになる最後の条件にする。この条件が飲めないなら俺はやらない」

隆がそう言くと、椿は顔を上げ睨みつけ、

「絶対的にそんなの許せない！」

と言った。

「それと約束な二度と絶好はしない。俺が親友だと思っているやつは、おまえだけだからな」

「卑怯だよ！」

椿の声を背に隆は土手を登っていった。

椿は隆と話し合うシュミレーションを何度も何度もしていたが、結局それがなんの役にも立たなかった。

しかしこれはこれで良かったのかもしれない、そう思った。

並々につがれた二合目の焼酎がテーブルにこぼれ地図を描いた。
グラスが割れなかったのは奇跡だろう。

隆は椿と別れてから帰宅し丁度夕食だったので、自室に行くこともなく、ここ数日ずうずうしくも馴染んでいる真紀とほのぼのと会話をし、恵が運んだ豪華な夕食を食べ上げて、涼子の一言に激高し怒りにまかせてテーブルを殴った結果がこれだった。

真紀は無言で凝固し、恵は冷静に場の安全を確認している。幸い危険物はないようだ。それを確認すると真紀の手を握り、自分の部屋へと導いた。

「あの部屋は俺の部屋じゃねえ！」

隆はそう怒鳴った。

「じゃあおまえが寝ている部屋はたれの部屋だ？」

「俺の部屋つつてんだろ、クソが」

涼子は表情をサツと消して立ち上がり、隆の襟首をつかんだ。

隆の会話は支離滅裂である。

たまりにたまった物がついに爆発してしまったのだ。

涼子はあえて息子の開かずの間を開いたのだが、息子に対して不器用な接し方が裏目にでてしまった。

せっかちで粗野な性格が時間をかけて、少しずつ何かを伝えると言っことに向いていない、ときには、オブラートに包むように伝えることも大事なのだ。

涼子は隆の襟首をつかみ上げて体を宙に浮かした。

仕事柄、腕力には自信があつた。

隆はお世辞にも偉丈夫には見えないし、スラツとしているが涼子と比べると身長も低い。

「今日はおまえを縛り付けてでもあの部屋に寝せる！」

涼子は力を緩め隆を降ろすと言った。

「ざけんなよ！」

今まで何度も取っ組み合いの喧嘩をしてきが、涼子に勝ったためしがない。それもそうだろう、それはもう本物と偽物ほどの差があるのだから……。

「おまえが俺に勝てるわけねえだろ！ 百年早いわバカ息子！」

隆は悔しいのか柱を殴る。

「姫！ 恵！ 隆を押さえつけたぞ！」

涼子は後方へ回ると隆を羽交い締めして言った。

「何すんだよ！」

恵はロープを片手に持っていた。真紀はその後ろに控えている。

案外平然としている。

涼子が羽交い締めしている間、二人は隆の体にはりついて、

「ごめんね隆君」

「おにいちゃんごめん」

と言って片足ずつ持ち上げる。

「あ、ちよつ、おまえら！」

隆はそのままアコーディオンドアの向こうの部屋へ連れて行かれた。

「暴れるな！ バカ息子」

隆はパイプベットに寝かしつけられベットに縛り付けられた。

「姫もおまけで」

涼子は笑いながらそう言って、隆の右手に連動するように真紀の腕を縛り付けかけたが、真紀が冷静な顔で、言った。

「あれ、計画と違う？」

「面白いだろう！」

「ちよつと待ってちよつと待って、涼子さん眠る準備とかしてきても良い？」

「そこかよ、やめてだる普通」

「別にわたしはかまわないよ、隆君と手を繋がれても」

と、言って真紀は部屋を出て行った。

涼子は隆と真紀のやりとりを聴いて腹を抱えて笑っている。

「おにいちゃん、真紀さんに変なことしたら駄目やけん！」

と、恵が言った。

「別に真紀とは何でもねえし」

そこで恵は真紀がいないのを確認するようにして、

「おにいちゃん、椿さんのことはいいの？」

と、真剣な表情で言った。

「何がだよ？」

「もういい……」

「変なやつだな……椿とは仲直りしたぞ」

「じゃあ、今日きてたんだ、やつぱり……」

恵は複雑な顔をし、隆はどうして恵がそのことを知っているのか聞こうとしたが、真紀がパジャマ姿で戻ってきて、そこで会話は止

まった。

真紀は嬉しそうに涼子に腕を差し出した。

涼子は二人を縛って、

「ごゆっくり」

と言って恵と一緒に出ていく。

涼子の背中が激しく上下していた。

「アリエネエ！」

と、隆は言って腕を持ち上げ、真紀を睨んだのだ。

再会と束縛

寝起きは最低だった。

痛みと夢が同調し叫び声を上げていた。

それをまるで寸劇のように眺めている真紀。

隆はだらしなく涎をたらし、高速の動きで顎に伝うそれを拭った。ベットの柱に未だ自分だけ繋がれている姿を見てため息をついた。真紀に対して無言の合図を送るが、隆のロープを外してくれという意志は届かない。

「おはよう、昨日はよく眠れた？」

真紀がにっこりと笑って言った。

「眠れるわけねえだろ！　どこの囚人だよ俺は」

隆は昨日　ベットに横になっていたのだが、真紀と一緒に眠ることも、真紀を床に寝せることもできなかったので自らが床に位置取った。

「わたしはよく眠れたよ、普段よりも」

「おまえのことは聞いてねえ！」

「でも……よかったね、少しずつね……」

伏し目がちに真紀がそう言ってきたので、隆は顔を背け真紀から視線から外す。

「ところで……いつ俺は解放されんの？」

真紀は慌ててロープと格闘を始めたが、固く結ばれてほどけない。

「涼子さん！」

真紀は他の部屋にも聞こえるように言った。

しばらくして涼子はやってきて、隆の醜態を見て、

「バカ息子よ、少しは改心したか？」

「アリエネエよ息子を縛るかよ普通、早くほどけ！」

涼子は腰に手を当て隆を睨む。

「間違ってます、お父様と言え」

隆はじたばたとし、

「誰が」

隆がそう言った直後涼子は踵を返す。

「待てよ……」

隆は動きを止め、

「俺が間違ってた」

と、言った。

涼子は振り返り、

「お父様？」

「ひでえ親、虐待だ！」

「これからフルハウスに行くことになってるが、おまえは抜きだな」

「言えればいいんだろ！」

そう言っただけは沈黙した。

涼子は真紀に目配せをし工具を渡しアコーディオンドアを調べている。

留め具を確認している。

「間違っていました……お父様」

と、か細い隆の声が聴こえたので、涼子は勝ち誇ったようにひとしきり笑う。

隆は暴れベットの揺れている。

「よし、あいつ放ってフルハウス行こうか」

と、涼子は言った。

丁度そのとき真紀はアコーディオンドアの留め具を調べるのをやめた。

すると、ドアは大波が押し寄せたようにぐしゃりと倒れた。

涼子は真紀に、

「でかしたぞ」

と言っただけ、いそいそと隆の下へ行ってロープを外す。

「もっと優しくできねえのかよ」

隆は抗議したが、涼子の目つきが変わりかけたのでおとなしくな

った。

隆の視界を塞ぎ、引つ張るように居間へと移動させる。

幸いアコーデオンドアと扉は近いので、隆の視界に広大の部屋が映ることはなかった。

隆が自分の物が何もなくなくなった空間を見て、絶望しないように涼子は隆の視界を塞いだのだ。

つまり広大の部屋に置いてあった、バッグや教科書、衣服、隆に必要な物すべては、すでになかった。

境界線はもう存在しなくなっていた。

日曜も午後に差し掛かるうとしていた。

さすがにこの時間になると田舎でも県道沿いは混み合う。

四人は車に乗ってフルハウスに向かっている。

運転席に涼子、助手席に恵、後部座席に隆、真紀の順である。

車をおよそ十五分走らせると市内でも、冠婚葬祭などによく使われる有名なホテルが見えてきた、タクシーがズラツと並び、正面玄関には何やら人がたむろしている。

「バカ息子！」

涼子はホテルの様子を見ると反射的に言った。

それ聞いて隆はホテルを確認し真紀の頭を押さえた。

「え？　ちよつと待つて、何？」

「いいからおとなしくしてろ」

ホテルには記者たちが控えていた。あれでは一般人に迷惑がかかるだろう、それくらいうつとうしい人数である。

真紀は顔を隆の膝に埋めながら、

「迷惑かけます、すみません」

と、頬を紅潮させて言った。表情と言動が一致していない。嬉しそうだ。

「真紀さんって本当にS A Y Aなんだ……」

恵が神妙に言った。

さすがに、隆の家に真紀が転がり込んで時間が経過したので、恵も始めとは違い慣れてきていたのだろう、そこに水を差された形だ。「テレビでどれだけSAYAを見ても、近くにいると喪失するよな」「おにいちゃん、いつまでそうしてるつもりなん？」

と、恵が言っていると慌てて、

「どけっ！」

と、言った。

隆の通う高校からは徒歩で五分程の距離。

フルハウスは喫茶店には無駄に広いスペースで入り口の裏は駐車場になっており、クラシックなバスのような車が止まっているだけで、がらんとしている。

涼子はその車の隣につけた。

「今日も繁盛してるな」

と、涼子が冗談めかして言うと、

「メグいつもこんなんで、フルハウスがつぶれるんじゃないかって心配しとる」

「あのなメグ　あの人はもともと喫茶店で稼ごうなんて考えがない。ただ、好きなことがしたいってただけだ」

恵が涼子を伺うように、

「そうなん？」

「金持ちだからな、おごって貰え！」

「メグがおらんと、すぐそんなこと言うんやろ、もう！」

四人とも車から降りる。

「バカ息子、ちょっと家の力ギ貸せ」

と、涼子が言ったので、

「なぜに？」

と、言って隆が訝しむ。

「家の鍵忘れてな、俺が持っておく」

「俺が開ければ済むだろ」

と、言いつつも隆は涼子に鍵を渡す。

マスターは快く隆たちを迎えた。

「やあ、早かったじゃないか」

涼子は仕事以外ずぼらなので、遅れなかった事実が珍しいのだ。

マスター自慢の料理もテーブルに乗って、後は隆たちが座れば昼食の始まりだ。

「メグがおるけん遅刻なんてせんよ」

「そうか」

「こんにちわ」

隆は顔をしかめた。

「どうしてこんなに豪華なんだ？」

隆は（？）眉を潜めマスターに言った。

「たまにはいいだろうタカシ」

「まあ、わるかねえけど……」

それぞれ席につく、

マスターはゆっくりとした足取りで、カウンターに戻る。

涼子は席についた皆を一人一人見渡して、最後に隆をじっと見つめ、語りだした。

「あの借家からは出るつもりでいたんだが」

「お母さん！」

恵が雰囲気を感じて慌てて涼子に言った。

隆は顔に影を落とす、下を向いて拳を握った。

「広大さんとここに帰ってくるはずだった……この店の後ろにある無駄に広いスペースに白い垣根のある家を建ててな」

しんとした空間に広大が愛してやまなかったロックバンドの曲が流れる。

「俺はなすがままになんて受け入れられない、だからあの家からはまだ、出ることはできない」

真紀は隆の拳をそっと握った。

恵は大粒の涙を流している。

「廣大さんが亡くなってから二年、芸能人が我が家に転がり込み、隆が人前で歌うようになって、バンドも組んで、何かが変わろうとしてる」

隆はギョツとした。

なぜ、涼子が俺の

「だから俺はこの波に便乗しよう、煙草も酒も短気な性格もやめて

……」

涼子は破顔した。

「無理やけんそんなん」

恵が早速ツツコミを入れると、

「地球が破滅しても、ありえん」

隆も間髪を入れずに言った。

「ちよつと待つてちよつと待つてひどいよそんな言い方」

「やめれるわけがねえだろ！」

と、涼子は言つて隆の頭にげんこつをした。

真紀が料理を口に入れて、

「おいしい」

と、言った。

皆それに続いた。

やけに重厚な扉があるなあ、隆はそこはかとなくそう感じていた。

昼食も終わり涼子が二階に行くと言い出したので、面白そうなので後をついてきたわけだが、期待していたものはなく、通路が続いて左に重厚な扉が、その先にも又、扉があった。

そぞろと歩いているとなにやら視線を受けていることに気付く、後ろを振り向くと真紀が、横を向くと恵が、真紀は唇を丸め、恵はだらしなく涼子に体をあずけながら、

やはり何かがおかしいのだ。

「お、おまえら何かたくらでねえだろうな」

と、隆は言った。

涼子は首を素早く動かし、隆を見据えて、

「おまえをいじめるところこっちも疲れるからな、バカ息子」

と、言った。

奥の部屋の前についたので、涼子は鍵を開ける。

「姫と隆から入れ」

と、涼子が言うと、

「どうして開けた本人から入らないんだよ」

と、隆が言った。

涼子は隆の背中を押した。入りまいと耐えていた隆だったが、涼子の力には到底叶わず室内に侵入した。

すると扉は閉められた。

「おい、何の真似だよ」

と、隆が言うが意に帰さない涼子。

「ごめんね　隆君……」

「どうせいつもの嫌がらせだろ、早く開けるよ」

涼子は扉を背にし沈黙を守る。

決して隆が鍵を開けて出ないように、ノブを持って。

「説明しろ、もうわけわからねえ！」

「見た方が早いかも」

真紀は隆の腕を取り、キッチンとトイレ、バスルームがある場所を抜けて扉を開けた。

するとまず目に入った物は、隆自らが使う生活用品。

それも整理されておらず乱雑に積み上げられている。

そして壁際にあるベットのの上にダンボールが縦長に解体された状態で立てかけられていた。

そこには赤いマジックでこう書かれていた。

「同棲おめでとう！」

と、そして右、中段辺りには、

「バカ息子に愛を込めて、家には帰ってくるなよ」

とも書かれていた。

最早言葉が出なかった。

開いた口が塞がらない。

それでもと、ポケットに手を入れ家の鍵を取り出そうし、

「涼子！」

隆はうなるように言った。

とても申し訳なさそうに首を傾げて真紀は隆にそれを渡す。

そこにはバイクの鍵とともに、見知らぬ鍵が二つついていた。

頭を抱えた、どうしてこう俺は周りに振り回されるのだろう、と。

「おまえも言えよな……」

「だって……」

「だってじゃねえよ」

「涼子さんに頼まれたし」

「高校生の男子を社会人の女と同棲させる親がどこにいるよ」

そして真紀は玄関を指さし

「そこに」

と、言った。

「アリエネエアリエネエ！」

「君と暮らすこと、やじゃないよ」

真顔で言う真紀。

「そういう問題か？」

「細かいことは、涼子さんはきちんと考えてるから大丈夫」

真紀はそう言って、封筒と通帳を取り出した。

それを隆に預け、

「私のお金は使っちゃ駄目だって、毎月生活費はそこに納めるからそれでやりくりしろ！　って言ってた」

具体的になるに連れて隆は同棲という事実、土手を離れ、広大の部屋を離れ、改めて向かいあった。

今までは見ないように遠ざけていたのだ。

台風のように玄関まで走ると扉を開ける。

丁度そのとき、車の音がし隆は外へと続く扉を開け階段を下りた。涼子と恵を乗せた車は走り去って行った。

借家の片付けが終わる頃には、ベランダから暗闇が迫っていた。

ベットにあつたふざけたダンボールは早々にゴミ袋に捨て、衣類は箆笥に直し、そうやって隆があくせく働く中、真紀は手短にあるレコードのジャケットの裏面を見たり、音楽雑誌を見ながら、とてもゆっくりと棚に収めている。

真紀が、隆が歌の練習にも用いる詩集を手にとって見ようとする度に隆は、

「いい加減にしろよ」

と、うんざりした顔つきで言った。

涼子はあのまま帰宅したのか隆が何度電話しようと応答がない。

その代わりと言っては何だが、恵からメールが一通届いた。

「おにいちゃんだけずるい！ メグも真紀さんと住みたい！」

と、顔文字入りで強く訴えている内容だ。

隆にしてみればできれば、恵と変わりたいのだ。

日本の歌姫と言われている、S A Y Aと同棲しているという、世の中の男子が望んでやまない状況であっても、広大という温もりには勝てないのだ。

片付けながら真紀がぼつりぼつりと言ったことを拾うならばこうだ。

涼子は隆と毎日のように喧嘩をしていたし、

隆は自分の部屋を封印して広大の部屋を自分の部屋だと思い込んでいたし、

人前で歌うということをしなくなった。

それは広大の望みを絶つということだった。

生前広大は

「歌いたいたときには歌いなさい。それを恥ずかしいなんて思うこと

自体が恥ずかしいことなのよ」

と隆に言い訊かせていた。

結果、幼い頃からボイストレーニングに偏らず、地声を保ったまま、歌そのものを愛したのだ。

これはとても遠回りなことかもしれないかった。

ともかく、広大が亡くなってからというもの、涼子と隆は逃避しすぎたのだ。

恵に至っては、毎日毎日泣き暮らした結果、あの家を支えることができているのだ。

整理された室内は生活感はなかったが、無駄に広いリビングの扉を開けると右手にキッチン左手にトイレ、その奥に浴室があった。1LDKだが、リビングの広さを考えると、部屋があと二つは増築できそうだった。

真紀は音楽雑誌を置いて、

「おなかすいた」

と、言った。

「体動かしてねえだろおまえ……」

「どうしてそんなこと言うかな」

と、真紀は誇らしげに棚を指さした。

「雑誌読んでただけだろ……」

と、隆は言ったが、いつもならテーブルに料理が並んでいてもおかしくない時間だ。

「そんなことないよ、ここみてよ」

と、真紀が言っている、その場所は棚の一番下で、真紀の肩幅にも満たない。

「おまえほんとそんなやつな、たちの悪い居候だ」

「そんなこと言うなら出てくよ、どこだって行けるんだから」

真紀はそっぽを向いて、立ち上がると玄関に向かった。

隆は慌てて真紀の肩を押さえる。

すると真紀は振り向いて、

「うそだよ！」

と、言った。

「おまえな！」

と、隆が言っていると真紀は少しだけ頭を下げ、

「隆君ごめんね、君にはわたしを追い出す権利がある」

と、言って隆の瞳を見つめ、

「涼子さんはバカ息子は姫がいると逃げられないだろ　なんて言
ってたけど……わたしが精神的に隆君を追い詰める？　そんなのい
やだから」

隆は肩をすくめ、

「SAYAには行くところがあっても真紀にはないだろ、しばらく
は真紀でいればいいし、別におまえがいるからってお荷物だなんて
おもってねえ」

と、言った。

そしてポケットに入っている鍵を取り出して一つ渡す。

「ありがとう」

と真紀が言っていると

「よろしくな」

と、隆が言った。

それから二人はどっちつかず離れた。

しんとした空間、隆は寒さを思い出したようにエアコンのリモコ
ンを操作した。

近いのか遠いのかわからない二人の距離、静かな暖気が部屋を包
む。

隆は自分の顔が赤面していることに気付いていた。

真紀はどうしていいのかうまく言葉がでないでいた。

隆は耐えきれず、

「俺、下に行って何か作ってもらってくるわ」

隆は逃げるように部屋を出ると、一階に向かった。

店内は常連客が二人、ステージ近くのテーブルで歓談しているのみで、夜もこの喫茶店は閑古鳥が鳴いている。

隆はカウンターでグラスを磨いているマスターを見つけると、早速声をかけた。

「慣れないな……」

「そりゃそうさ、自分の部屋を出て下に降りると店になってるからね」

マスターはグラス置いて言った。

「マスターごめんな、迷惑かけちまって」

「涼子と広大が住んでいる頃に比べたら、タカシと真紀さんなんておとなしいものだろう、違うのかい？」

隆はマスターの言葉に驚いたように反応した。

「女心と秋の空と言ってな男女の関係は難しいぞ」

そこで、齟齬にきづいたように咳払いをして、

「や、あの二人にそれは当てはまらない、か……ところで用事があったんじゃないのかい？」

と、隆は肩をすくめて、小さく笑う。

「二階に芸能人一名、十七歳男子一名住むことになりました。よろしくお願いします」

と、言った。

「よろしくなタカシ」

マスターは隆の頭に手を置いて言った。

「家賃も光熱費も涼子が納めるらしいから、気をつかう必要はないぞ」

「あいつ信用ねえ、らしいとか言われてら」

「冗談さ」

二人は軽く笑った。

「用件忘れてた、挨拶もそうだったけど、腹減って」

「夕食かい？」

「何かできる？ 勿論お金は払う、当たり前だけど」

マスターは髭を触りながら逡巡して、

「涼子に言われてるんだ。生活は全て二人の力でやるようにと、腹が減ったら自分たちでどうにかしろ、そんなことを言ってたぞ」

「あいつ……でも、俺客！ 客！」

隆は身振り手振りで大げさに訴えたが、

「それでも駄目、念を押されてるからね。悪いねタカシ」

隆は首を振って、

「マスターは悪くないし、涼子の野郎！」

「橋を渡った先にあるスーパーで、弁当でも買ってきたらいい」

「今日のところはそうするかな……ありがとうマスター」

隆はそう言って店を出た。

不機嫌さはすぐに顔に現れる。

真紀は口を尖らせ隆に、

「遅いよお」

と、言った。

「仕方ねえだろうが、下で食べるつもりだったけど、涼子がフルハウスの食えることを禁止してたんだから」

と、テーブルに弁当や飲み物の入った袋を置いて言った。

「あつ！ ごめん、それ言うの忘れてたわたし」

「でも、結果マスターに挨拶してきたしな」

と、隆が言くと、

「わたし、社会人失格！」

と、言って立ち上がる。

「おまえって社会人？ ニートだろ！」

と、隆が言くと真紀は、腕を組んで、

「君君、権利収入って知ってる？ 不労所得って知ってる？」

「居候にはかわりねえし」

「SAYAは勤労しなくてもお金が入るのだよ」

隆は真紀を無視し、ペットボトルの蓋を開け口につけると喉に流

し込む。

「今日は働いたから喉渴いたわ」

「ちよつと待つてちよつと待つて無視しないでよ」

「いいから早く行つてこい！ 俺はいい加減腹が減つた！」

と、隆が言つと真紀は頬を膨らませ、

「ついてきて？」

「わりいうつかり忘れてた。閉店後にしよう」

と、隆が言つと真紀も頷いてテーブルに座つた。

白いテーブルの上に並べられた弁当、真紀はその一つを取つて容器を開ける。

小さなテーブルに向かい合う二人、フローリングの床が妙に冷たく感じた。

この部屋は人が暮らせるといつても、まだまだ未完成だ。

例えば、ベランダにはカーテンがない、ベットは一つに布団も一組しかない。ポスターやタペストリーといった飾り物もない。

そんな空間を今、リアルに共有している。

互いに意識を増大させる材料は豊富すぎるほどあつた。

今まで真紀は恵と涼子と寝ていたわけだし、精神的にもそれどころではなかつたのだ、それは隆にしても同じことで、ふと慣れたかなと思うところに二人で檻に閉じ込められ、これからおまえたちだけで生活しろと言われたのだ。

お金の管理もしないといけないし、實際食うにもこうやって困る次第である。

「わたしつてこういうタイプじゃないのに」

真紀はぼそぼそと蚊がなくなつたように言つた。

「俺だつて、もぞもぞするわ」

二人とも弱気である。

「それはお互い異性と感じてるから？」

「うだうだやるのは嫌いなんだ俺、やめたやめた」

隆はそう言つて真紀の弁当にある焼き蕎麦をひとつかみ、

「楽しみにとってたのに！」

「おまえも俺と同じかよ」

「かえして！」

「口に入れてから言うな」

真紀は隆の弁当にある焼き蕎麦をひとつかみ、

「おまえ！」

そうやって二人で顔を見合わせて笑った。

「らしくないよね」

「今まで通りでいこう」

そうしてささやかな夕食は終わりを告げた。

どうやら睡魔には勝てなかったようだ、隆は布団を深く被り壁に張り付くようにして眠っている。

真紀は隆と反対方向を向いて眠っていたが、時計の長針がゼロを超えて三時を回ると目が覚めた。

しばらくはおとなしくしていたが、それも耐えられなくなったのか、起きる。

真紀はゆっくりと壁に張り付いている隆に近づいて、寝顔をのぞき見る。

「かわいい」

間延びした小さなささやきがもれた。

今でも業界には前代未聞の珍事件、それが暴風雨のように吹き荒れ、舞ちゃんも右往左往してるのだろうな、真紀はふとそんなことを考えた。

ステージの上に捨て置いてきたSAYAという自分がふと蘇り唇を噛んだ。

隆はそんな真紀の考えも知らずに安らかな寝息を立てている。

真紀は頬をつつく、一回二回と……

隆はうなり寝返りを打って、真紀を抱きしめる。

隆の体温が伝わり、真紀の心臓は跳ねた。

「母さん……」

「君、そんなこと言うと、ただのマザコンだよ」

真紀は破顔して頬をつつく。

隆はしばらく左腕を動かして、目を開けた。

暫時、後頭部を打ち付ける。

「いつてえ……」

「起きて起きて」

「何時だよ……」

「三時……」

隆は寝ぼけ眼をこすり、

「勘弁しろよな」

と言つて起き上がる。

「寝顔、かわいいね。子供みたい」

「アリエネエ！」

真紀はクスクスと笑う。

「これからは毎日わたしに起こされるよ」

「学校帰り、布団買つて帰るからな！」

「必要ないよ」

「あるに決まつてるだろ！」

「でも、そうやって憎まれ口たたいても隆君は起きて、わたしの相手してくれるんだよね」

隆はそっぽを向いて、

「そんなことアリエネエ」

隆は横になろうと、布団をかける。

「起きて起きて起きて」

舌打ちをし、乱暴に布団をはねのける。

真紀と向き合う、隆は睨んでいる。

そんな隆に真紀は片腕を差し出し手を握ると言った。

「ねえ、これから夜の町を散歩しない少年？」

人工約七万人のこの田舎に高校生男子とSAYAが手を繋いでス

ーパーに行くなど誰が考えつくか、

外は、見渡す限り人が歩いていない。

真紀は横断歩道で立ち止まると両手を広げた。それを見て慌てて隆は真紀を連れ戻す。

出がけに隆は朝食を買いに行くと言ったが、そんなことどうでもよかったのだ。

なぜなら隆は橋を通らず、遊歩道に向かい遠回りしていたのだから。

境界線の向こう側

靴を履いてノブに手をかける。

忘れ物がないか持ち物を確認して、隆は居住まいを正した。

フローリングの床を転び、這うように進み、中腰に起き上がる。

「隆君いつてらっしゃい」

と真紀は寝惚けて言った。

隆はその様子を見て軽く笑う。

「典型的な駄目人間だな」

真紀は何語かわからない猫なで声で何かを言ったが、それがどんな意味をもつ言葉なのかは隆には判別できない。

「家からは出るなよ。いつてきます」

と、隆が言っていると真紀は寂しそうな顔をした。

外に出ると一陣の風が吹いた。隆は背中を丸め足早に階段を下りた。

いつもと違う朝、涼子の罵声も恵が作る朝食もない朝、バイクで通学しない朝。それらすべてが隆にとって新鮮だった。

正門に続く歩道の手前にある交差点。ここで松尾と毎朝合流するのだが、今日は先客がいた。

頬に張り付く髪をうつとしそうに払いのけている。

身長はとも十七歳には見えないし、その身長に不釣り合いなギターを背負っている。

山中椿はそこで隆を待っているのが当然のようにただずんでいた。

「おはよう隆」

「おはよう椿」

そんなあたりまえの挨拶の中にも椿は目力を込めて隆を見つめる。

「いつもより早いね」

「まあいろいろあってな」

松尾が歩いてきたので会話は途切れた。

「おはようっす」

と松尾が言つて二人は松尾の歩調に乗って歩き出した。

「隆が俺様より先に待ってるなんてな」

「たまにはそんな日があつてもいいだろ」

「まっちゃんバンドの件はどうなつたの？」

「まとまつたぞ、とりあえずだが 昨日良太のベースも買つてきたしな」

「俺、今日から参加できるわ練習」

隆がそう言つたので、

「いよいよバンド始動ね、今日から」

椿がそう答える。

「頑張れよ、リーダー！」

隆が椿の背を叩くと、椿は瞳を上げて、

「どうしてあたしなの？」

「おまえじゃないと、バンド抜けるからな」

隆と椿は松尾を置いて先に行く。

松尾は小走りで近づいて、

「おまえら仲いいな」

「仲いいぞ」

「そんなことないわよ」

椿はすました顔で言つた。

「これが本来の形だな。あーおれさまのアウトローはどんどん遠のくよ」

三人は階段を上り教室に向かった。

月曜の学校は気だるさが伴う、それは担任の村山にも以心伝心。

つつい連絡事項だけで事務的に済ませてしまいがちだ。

椿は顎に手について無関心に外を眺めている。

隆と松尾の席からは遠い、椿の席は窓際が一番前だ。

椿は授業が始まる前、隆たちの方を一度だけ向いた。

これもいつもと違う光景だった。
恐らく違うということに気付く人間はだれもない。

昼休みになると隆たちの席の回りはちよつとした集団になった。
隆と松尾が席を向かい合わせ、椿は椅子だけを移動させ、良太たちに至つてはこの間と同じ、昼休み体育館に行くという連中の机と椅子を借りていた。

「フルハウスの二階がスタジオになっててな、そこを借りられることになった」

松尾は早速皆が集まると言った。

それを聞いて一番に反応したのは他でもない隆だった。

「ありえん！ 反対反対！」

「どうしてだ、反対する理由なんてないだろう」

そこで良太がおずおずと手をあげて、

「あの……フルハウスって何ですか？」

と、言った。

「デコボココンビは知らないんだ」

と、椿が言うと、松尾は思い出したように、

「悪いな 俺たちがよく行く喫茶店だ、その二階がスタジオになっててそこを借りることができたんだ。しかも……聴いて驚け利用料ゼロ円」

「学生に優しい。デコボコはバンド初めてだから言っておくけど、お金ってけっこうかかるのよ？ 弦を張り替えるお金もバカにならないしね」

「そうなんですか…… あつ僕、ベース買いました」

良太はにっこりと笑って言って更に、

「恭ちゃん大丈夫かな……」

「良太、それも解決した。フルハウスのマスターがドラム貸してくれて教えてくれるって言ってたぞ」

「ほんとですか、ありがとうございます。ほら、恭ちゃんもお礼」

「あ、ありがとう！」

と、一際大きな声で、

隆はその声にはっとして、

「とにかくフルハウスの二階は駄目だ」

「どうしてなのよ」

「俺様はたれもが幸せになる方法だと思っぞ。よそでやるとまた、もめるだろうおまえ、今回は失敗はなしの方向で」

松尾がそう言うとき隆は黙り込んだ。

もつともである。

松尾純一は隆の一番のファンであり親友である。

様々な角度から検証したに違いない。

しばらく隆は考えていたが、

「かつてにしやがれ」

と、ぶっきらぼうに言った。

「隆も納得したことだし、みんな学校が終わったら噴水公園に集合よ！」

と、椿が言った。

恭介が弁当箱を開くと皆、後に続いて、少しだけ遅い昼食が始まった。

放課後になるにつれて隆は憂鬱になった。

真紀はまたしても重要な事柄を隆に伝え忘れていたのだ。

隆に隠れて引越作業をしているときに涼子は、フルハウスの二階の手前の部屋はスタジオになっているから、隆が歌の練習をするのにも使える。

そう作業をしているときに言っつて、無論、真紀もそれを聞いていたのだが、大事も小事も計らない真紀の性格が、右から左へ言葉を通過させ、更に「これはたいしたことではないわ」と、かつて気ままに解釈したのだろう。

隆は椿と肩を並べ噴水公園の休憩所で良太と恭介を待っている。

松尾は歩道を挟んだ芝の上に立っている。

「隆、変、どうしたのよ」

と、椿が背にあるギターの位置を変えながら言うと、
隆はぶつきらばうに、

「別に何でもねえ」

と答える。

携帯電話という代物は現在の真紀 SAYA にとってもっとも
鬼門に位置するもので、現在は常に電源が切られているのだ。

良太が恭介をしたがいテクテクと芝生を歩いてくるのが見えてく
ると隆は言った。

「俺、先に行くぞ」

「ちよつと隆？」

と、椿が言ったが隆は踵を返していた。

「あいつ逃げた？」

「先に行くつて」

椿は下唇を少しだけ突き出した。

隆は遊歩道を出て視界から二人が消えると全力疾走でフルハウス
へと向かった。

隆が家に戻ると当然のように真紀は布団を頭まで被り眠っていた。
揺すっても起きないので、慌てた隆は真紀を壁際に押しつけて上
半身だけ起こして、

「火事だ！」

と、怒鳴った。

すると真紀は、刹那半眼になると大きく目を見開いた。

「どこ、何？ 火事？」

と驚いている。

が、隆は気にかけない。

「いいから起きろ！ これから俺が言うことをよく聞け！ 絶対に
この家からでるな！」

真紀はポカンとしている。

「きいてんのか」

「ちよつと……待つてよ」

「待てねえよ、緊急なんだよ」

隆は真紀の肩を揺する。

真紀はだるまのようにゴロンと動く。

「もう時間がねえ！ とにかくおれが戻るまで出るな！」

隆はそう念を押して出て行った。

隆が玄関を閉める音が聞こえると真紀は紐が切れたようにパタリと布団の上に転がった。

二階から一階に下りるとフルハウスに続く道路を曲がる椿たちが目に入る。

「やべえ」

隆はたたらを踏んでフルハウスの扉を開けると中に駆け込んだ。

「あいつ妙なものでも食べたのか？」

松尾は隆の奇行を眺めて言った。

「知らない」

「恭ちゃん遅いよ」

「待つてよ良太君」

マスターはカウンターに立つてグラスを磨いていた。

隆はマスターの下まで行くと、荒い呼吸のまま、

「真紀のことは椿たちに内緒にしといて！」

マスターは頷いた。

「ういーすマスター」

と、扉が開いて聞こえたので隆は、

「間に合ったよ……」

と、言つてカウンターにへたりこんだ。

「お世話になります。マスター」

椿が言った。

良太と恭介は軽く頭を下げた。

「こいつが、ドラムの恭介です」

松尾は振り返って言った。

良太は恭介の背中を押す。恭介は緊張し進もうとしないので両手で前へと押しだした。

「恭ちゃん、挨拶挨拶」

と、微笑む良太。

「お、おれ、橋本恭介です」

やたらと大きい声は店内に響く、奥にいる二人の常連客は笑っている。

マスターはカウンターから出て恭介を上から下まで見渡して、

「いい体格だ。教え甲斐があるね」

「やる気があります。ね、恭ちゃん」

恭介は下を向いていたが、マスターの目を見てハンマーが振り下ろされたような勢いであいづちを打つ。

「良太じゃなくて、恭介が言わないと駄目でしょう」

「良太は過保護だぞ」

隆はやつと落ち着いたのか椅子から立ち上がると言った。

「情熱情熱！」

松尾も恭介を後押しする。

「よろしくおねがいします！」

店内に響く恭介の声はクラシックな音楽を殺し、常連客の会話も殺した。

笑いが起きる。

マスターは恭介の肩に手を置いて、

「元気がいい、こちらこそよろしく」

「恭介、マスターのことはこれから師匠と呼べ、なあ隆！」

「え？」

「おうよ！」

「せめて、先生にしてくれないかい？」

「よかったわね、恭介」

椿が恭介の背中を叩いた。

そこで緊張を思い出したように顔を真っ赤にする恭介。

「先にスタジオに、きりがついたら向かうよ」

マスターは松尾に鍵を渡す。

「了解！」

松尾を先頭にメンバーたちは二階へと向かった。

隆はよそよそしく、良太は物珍しそうに重厚な扉を見つめ、椿は心意を新たに、恭介は

先ほどの緊張を引きずっている。

松尾が扉を開ける。

床一面には絨毯が敷かれ、正面に六畳程の区画が仕切られていた。

松尾はその場を覗くと、

「こりゃ、すげえ」

と、言った。

室内にはPAなどが整理され並んで、本格的な録音スタジオといった具合である。

隆も顔だけ覗かせて、

「老人バンド侮りが足し、こんな設備があったとは」

椿は目の色を変えた。

早速あれこれと見て回っている。

「良太君、俺たち場違いみたい」

「記念すべき初日だよ。胸を張って！」

「で、でも……」

と、良太は言ったが中を覗いて驚いている。

椿は区画から出ると、広がった空間を見渡した。

やおらゆつくりと歩いて、部屋のちょうど中央まで行くとパンツと手を叩いて耳を傾けている。

「すごい。吸音材使っているし、市内でもこれほどの設備はな

い！ デコボココンビの下手な演奏目立つわよ、がんばりなさい！」
と、椿が言った。

良太は目をキラキラと輝かせ、

「はい！」

と、元気よく答えたものの、椅子を見つけると力尽きたように座る。

楽器を粗雑に立てかけた。

椿は良太の所作を見逃さなかった。

「楽器が泣いている」

良太は椿の言葉を理解できず（？）

ベースはゆっくりと傾く、慌てて片手でそれを受け止めると、

「あ、ごめんなさい」

と、言った。

「おまえ、命拾いしたな」

隆は良太の耳元でそう言った。

ことの重大さに気付いて、良太は言った。

「すみませんでした」

「あたしにあやまって、どうするのよ？」

「山中　今回だけ許してやって」

松尾が間に入る。

「それより、リーダーに挨拶してもらおうぜ！」

「そんな、改まって」

隆がそう言うのと椿は赤面して言った。

「今みたいに言いたいことあるだろ」

「そうだな、ここはリーダーに任せよう。俺様の仕事は終わった」

そう言っつて松尾は椿の下まで行くと、この場所の鍵を渡して所定の位置に戻ると腕を組んだ。

隆は椿の隣に立つ、良太はベースを抱くように持ち、隆の隣へ、

恭介はおどおどと後に続く。はみ出た恭介を良太が中に引き入れた。
静寂が満ちる。

椿は軽い呼吸を繰り返して顔を叩いて語りだした。

「あたしたちは今ここにバンドを結成しました。今まであたしは何度も何度もバンドで失敗してきて」

そこで隆に視線を移して、隆は目をてのひらで覆う。

「今度は絶対に失敗しない、こんなリーダーでよければよろしく！」
椿は半ば自分に言い聞かせているように言った。

遠く離れて見ていた松尾が手を叩くと、良太と恭介もそれに呼応した。

隆は、半歩踏み出し、椿の顔を覗いて、

「泣き虫椿」

「泣いてなんかいいわよ！」

椿はそっぽを向いた。

「まあ、あれだな、おまえら二人は特別すぎる。俺様なんて到底おいつけん、だからなアウトローでいいのさ俺は」

「や、ありえねえだろ」

「恭ちゃんアウトローって何？」

「おれも松尾君が言うそれを知らない」

「それより、良太と恭介！ あなたたちは楽器を大事に扱いなさい！」

機嫌を直した椿がビシッと指さして言った。

「そうねあとは」

椿がそう言ったときだった、電磁波シールドも兼ね備えた扉が開いたのだ。

「部外者は立ち入り禁止ですよ、喫茶店は下の階です」

椿は目を細め話しの腰を折った張本人に向かって言った。

きよろきよると辺りを見渡すと隆を探して当てて、

「隆君おかえりなさい、それとおはよう」

と、真紀は悪びれもなく言った。

室内は録音スタジオと練習場で二重の防音が効いているので、真紀の声は響いた。

隆は、

「アリエネエ！」

と　しゃがみこんだ。

「隆の知り合いなの？」

「でも、おかしくないか……」

「おかえりなさいって言ったね恭ちゃん」

うなづく恭介。

「そもそも、間違つて上にくるか？　看板も見えないだろうし、入り口は裏だぞ」

「どうしておれはこんなに不幸なんだ！　真紀おまえ自覚なさすぎ！」

「だって……わたしたちの家の庭だよここ？」

「庭つてスタジオだろうが！」

隆は、力強く歩くと真紀をくるりと反転させ、外に出そうとする。

「俺様思い出したぞ、隆の携帯にあつたギンガムチェックの女だ」

松尾は笑い出した。

「隆ちよつと待ちなさい！」

「おまえらには関係ねえだろうが！」

「あるわよ、練習の邪魔されたんだからね！　それと……。わたしたちの庭つてどういうことよ」

「樁いい加減にしろ！　今日はもう解散！」

「リーダーはあたしだけど？」

「山中さんおちついて！」

「不法侵入よ、警察に電話する」

真紀はスルリと隆の束縛から解放されると、樁の前に立った。
「何ですか？」

真紀は隆よりも身長が高いので樁は見上げている。

「君が特別の樁ちゃんか　ライブのときよりもかわいいね」
真紀は樁を観察している。

「でも不法侵入にはならないかな、わたしと隆君はすぐその奥の

部屋で同棲してるから」

「ウソよ、そんな……」

「わたしが隆君と暮らしているのは確かだよ。居候の身です」

「どうしてきたんだよ……」

「ちよつと待ってちよつと待って、それって私が悪いの？ 隆君は外に出るなどは言っただけ……。ここは中だし、一般人がいるなんて思わないでしょう」

最もである。隆にここにスタジオがあると真紀が説明をしていても、そのときにはフルハウスの二階で練習をするということは決まっていたのだ。

ここよりも好条件な場所はない。隆にだってそれは理解できるのだから……。

「わかった、言い過ぎたよ……」

良太はこの顛末を見守るつもりでいたが、そうもいつてられない状況になった。

オシャレをするために雑誌や、流行の音楽をそれとなく日常的に内包するという行為があたりまえになりつつあった。

コンビニや書店に立ち寄り雑誌を読みあさるのだが、その雑誌によく出る人物に真紀が酷似しているのだ。

良太は思ったが最後、口に出さずにはいられない性格なのだ。

「あの……もしかして真紀さんって歌手のSAYA？」

「これも時間の問題だったか……」

隆はうなだれた。

「どうしてこうなってしまった」

隆はベットに腰をかけたらしなく言った。

テーブルを挟んで真紀は肩肘について、椿の視線を受け止めている。

時折親の仇でも見るような目つきで、部屋中をくまなく穴が穿つほど見渡す椿。

「ほんとに同棲してるなんてね　それも芸能人と」

椿は憎らしげに言うのと立ち上がり、

「ベットが一つしかない！」

腰に手を当てて指さすと言った。

「それはだな、今日のうちに布団を買いに行こうと……」

「昨日はどうしたの？」

「布団は一組でもいいよ」

「よくないわよ！」

バンド始動初日、真紀という存在が介入したことにより、練習どころではなくなったのだが、空気も読めず真紀は終始あつけらんとしていた。

それは先ほどスタジオのときと変わらない。真紀は、パイプ椅子を広げスタジオの端に陣取ると腰掛けたのだ。

当然、メンバーたちからは矢継ぎ早の質問が飛び交ったが、それを懇切丁寧に一から十、いや話しが大分誇張されているので、一から百とでもいおうか、答えていた。

おかげで、隆の出演は真紀がウソをついたときだけで済んだ。

椿は黙り込んでしまい、録音スタジオに入り硝子越しに口を尖らせて、その光景を眺めていた。

マスターが仕事を切り上げてやってきたときには、椿を省いて皆落ち着きを取り戻していた。

良太と恭介はドラムセットの前に立ってマスターから手ほどきを受けた。だが、メンバーが一致団結とはいかなかった。松尾は、とりあえずこれからは毎日学校が終わったらここに集合とだけ、良太と恭介に伝え「あとは任せた！」と言って帰っていった。

バンド始動初日は散々だったのだ。

「腹減った……」

隆の間抜けな一声に、

「わたしもおなかすいた……でも、弁当はもう、や」

椿は備え付けの筆筒を開けたり、キッチンの戸棚にある数少ない

食器を確認したり、浴室を覗いたりしてしていた。

この部屋は広いので、いちいち端から端まで行くだけでも時間がかかってしまう。

椿は、キッチンからリビングに行く扉を出ると、すぐ近くにあった冷蔵庫を開けた。

電源は入ってるが、中は空っぽだった。

「何もないじゃない」

冷蔵庫の隣に置いてあったゴミ箱からは弁当の容器が飛び出ている。

「昼も弁当だし、朝も弁当だし、これから毎日弁当だな」

と、隆が言っているのを椿は聞いて、

「栄養かたよるわよ」

「しかたねえだろ、二人ともつくれねえんだから」

そこで真紀は顔を上げて、

「ね、椿ちゃん作れないのかな。家政婦になる？ わたし雇うよ」

「真紀、いい加減にしろ」

「毎日ここにきて家政婦の仕事するの。椿ちゃん意外を雇ってもいいんだけど、世間の目があるしね」

「おまえが、すればいいだろ」

「そんな面倒なことできない」

「アリエネエ涼子に頼まれてるんだろうが」

「でも、涼子さんの禁止事項には触れてない。うん」

「やな大人だな」

「弁当も楽しいかな。隆君と毎日深夜徘徊できるしね」

真紀はクスクスと笑った。

「おまえが毎日アリエネエ時間に起こすんだろうが」

椿はやりとりをじつと聴いていが、

「バイト辞めちゃったし、雇われてもいいわよ。このバイトならバンドを犠牲にすることはないしね。時給はおいくら？」

柳眉を上げて言った。

隆は驚き、

「椿な……冗談だろ……」

と、言った。

真紀はSAYAとしての相場を指で丸を作ったりして掲示した。

「交渉成立ね！」

「アリエネエから、椿も笑ってないで何とか言えよ」

「別にねえ？ それにあたしは自活してて料理の腕もあるし、お菓子屋さんでバイトしてたしね、やるからには絶対手は抜けない」

と、椿が言くと、

「お菓子食べたい」

「昔隆は、毎日食べてたわよ」

隆は話しの雲行きが怪しくなってきたので立ち上がる。

「とりあえず、布団買ってくる」

「あたしもついて行く」

「わたしも行きたい！」

真紀も立ち上がったが、

「おまえは駄目だろ、ちょっとは芸能人だという自覚を持て！」

「でたいでたいでたい」

「無理だろ」

「布団は大きいし。タクシーでないと。わたしが乗っても大丈夫でしょ、ね？」

「歩きはきついかも」

確かに真紀の言うように、歩きで運ぶには大きすぎるだろう。

「しかたねえな……」

「変装するしかないわね」

と、椿は言って洋服箆笥をあさった。中には隆と真紀が実家で暮らしていたときに、大量に通販で注文していた真紀の衣服が収納されていた。

「はいはい、男は出る」

椿に背中を押されて、キッチンへ続く扉を開ける隆。

しばらくして椿の「入ってきてもいいわよ」と言う合図を聴いて隆は扉を開ける。

そこには真つ黒いドレスを着たSAYAが立っていた。

隆は物言えず、ただじつと見つめる。

メイクを施し、テレビの映像とそっくりな真紀が立っていた。

「歌うようになったきっかけは？」

と、椿がマイクを持つような仕草をして言った。

「二歳のときだったかな」

そこで隆は、ハツとして、

「やめろおまえら！」

椿は真紀の背に手を置いて笑いをこらえている。

「SAYAさん、二歳の少年とは鶴佐市在住の高校生のことですよ
ね」

「はい。いつもアリエネエアリエネエと言う少年のことです」

二人はひとしきり笑ってから扉を閉めた。

隆は扉を背にして座り込んだ。

「よく知ってるね、あれが隆君のことだって」

「あれだけ毎日毎日、同じ映像流されたらいやでも気付くわよ……
今となつては」

「そうだよね……」

「あなたって本当にあのSAYAなんだ」

「わたしもときどき間違いであつてほしいとおもうときがあるけど、
そうみたい」

椿は真紀の髪を整えながらこの奇妙な出会いにも、自分という齒
車が一つかんでいることを漠然と感じた。

隆は二人の会話をじつと聴いていた。

三人は市内にあるホームセンターに来ていた。

閉店間近で、客の数は少ない。

両開きの自動ドアに立って、変装し逆に目立っている真紀はサン

グラスを指ですくい上げながら言った。

「広いね」

「おまえついてきてるじゃねえか」

「大丈夫でしょう。人も少ないしね」

椿を先頭に歩く三人。

食器が並ぶ場所まで来ると椿はメモを片手に吟味をしていく、真紀は陶器のコップがおいであるコーナーを見ると、

「三人のおそろいのコップを買おう」

隆の手を引いて言った。椿も真紀の言葉に惹かれ手を止めついでいく。

「別にコップなんて飲めればいいだろ」

「これ可愛い」

真紀は二人の前にひとつのコップを差し出す。

「こつちの方が可愛いわよ」

隆はカートに手をついてため息。

真紀は端にあったコップを取ると、隆の目に重なるようにして、

「これは？」

と、言つて笑つた。

「いいんじゃないの？」

「別に何でもいい」

三人の了承を得てカートにコップを入れる。

椿はメモに目を落として三つ揃いの茶碗を手にし逡巡しカートに入れる。

「でも、大体必要なものはあるわよね」

「こういうところに来ると無駄なものまで買ってしまうな」

案の定真紀は可愛いと言って、次から次へとカートに入れる。「ダメ！」と椿がその都度制止する。

「椿がいてくれて助かるわ。おまえのバイト代は真紀からだが、その他の費用は仕送りだからな」

「無駄使いはダメ！」

「おまえはしつかりしてるもんな」

「椿ちゃんって舞ちゃんに似てるかも」

真紀は布団コーナーの角で微笑し振り返った。

「舞ちゃんって誰？ その人も隆の知り合い？」

「わたしのマネージャーさん、隆君とは電話で一度だけ」

「俺、そんな人知らんぞ……」

「逃げた日にわたしより先に電話とったでしょ」

隆も合点がいつて、

「あのときな」

「家政婦は乗りで言っちゃったけど……椿ちゃんとならうまくいきそう……よろしくね」

真紀はペコリと頭を下げる。

「あまり人がいる方を向いたらばれるわよ真紀さん」

椿がそう言うとき真紀はクスリと笑った。

「それぞれ」

隆が布団を見上げて、

「寝られればいいか……よし椿、真紀をタクシーまで連れて行って、店員呼ぶ」

と、隆が言うときコクリとうなずいて二人は先にいった。

小さなテーブルは部屋の中央にあってその上にはガスコンロに火がついて鍋を煮立てさせている。

野菜や肉が香りを放ち食欲をそそる。

「まだ煮えてない！」

真紀が早速箸を鍋に入れて椿に叱られている。

小さなテーブルに三人が囲い窮屈そうではあるが、皆食欲からか表情は柔らかい。

「で、椿さん、作ると言っておきながら鍋ですかい」
と、隆が言った

「仕方ないでしょ。こんな時間なんだし」

「もう食べていい？」

「あたしが取ってあげる」

と、椿がより分けている。

「ちょ、それおれが食べる予定」

「あたしは真紀さんに雇われてるから、事業主が第一」

「憶えてろよ椿」

「そんな 隆君おおげさだよ」

「食事時になると短気になるんだよ、涼子のおかげでな！」

「箸が飛んでくるもんね」

「食べるときは食べることに集中しろ！ と言っておきながらメグには何も言わん」

「それは仕方ないわよ、メグちゃんが家庭を切り盛りしてるんだから」

真紀は美味しそうに肉を口に入れている。

隆のお代わりのご飯をよそい、具材が煮えてきたので火を落とし椿もゆつたりと食べ始める。

椿はふとベランダに続く窓から外を見つめる。夜の帳が落ち、見上げると星が輝いている。

隆が芸能人のSAYAと同棲していると聞いたとき、椿は隆を取られたと思い、隆に裏切られたように感じた。しかしこれまでの経緯を聞き、少しずつ溜飲下げ、家政婦のバイトを引き受けて、今では隆へのわだかまりも消えつつあるが、胸の奥をチリチリと何かが焦がしている。

「椿どうした？」

隆がボーツと手を止めている椿に言った。

「ん、何でもない」

あたしは多分自分にしてくれなかったことを、真紀さんが隆にさせていることが氣にくわない。

椿はそんな思いを殺し箸を動かした。

椅子の上に雑誌を重ね、高さを調整し座布団を二つ折りにして恭介はスティックを持って叩いていく。

良太はベースを抱えながら、

「恭ちゃんがんばって」

と言った。

足下にスタジオにあったマニュアル本を広げて、ぎこちなく指を動かしている良太。

演奏というのに遠く及ばない。メトロノームはチクタクとリズムを刻んでいるが、とても追いつけないのである。

積み上げられた雑誌が崩れた。それを直そうと足を上げると座布団を蹴飛ばしてしまう恭介。

「うまくいかない」

「僕も」

良太はにへらと笑っている。

「癖をつけるしかない、まずは体勢に癖を あっ」

椅子に乗っていた雑誌が全て落ちる。

良太はそれを見てひとしきり笑った。

「とにかくやるしかないよね、ぼくたちだけ初心者なんだから」

恭介は椅子に雑誌を積み上げ、座布団を所定の位置に戻す。

「がんばる」

「ねえ恭ちゃん、ドラムはバンドの柱だって」

恭介はうらめしそうに良太を見つめた。

マスターから教わった方法を実践している恭介。

「とにかく、おれ、隆君が言う洋楽のコピー百回はできるようになりたい」

「僕もモータウンサウンドを聴きながら、ベースの練習、でも衝撃だよ、海外のティーンは始めからオリジナルだなんて」

「一昔前の外国人のアニメ絵が下手なのと同じこと」

「ん？ どういうこと？ 僕にもわかるように説明して」

「日本はマンガの国」

「なるほどなるほど、日本人からすれば普通だよなマンガを読んだりするのは」

そこでスティックを止める恭介。

「良太君のおじいちゃんは演歌好きでしょ」

「好き好き大好き、あつ」

「普通のずれかも」

「好きのずれ？　なんだか奥が深いね……隆君なんて芸能人、しかもSAYAと同棲してるしね」

「おれもおどろいた……でも、隆君ならあまり違和感はない」

良太は納得顔で神妙にうなずいた。

恭介は雑誌や座布団をそのままに、上着を脱いだ。

「どうしたの？　気合い入れてるの？」

「ジョギング」

良太はベースをゆつくりと床に寝かせて立ち上がる。

「気分転換にもなるね。僕は先に出てるよ」

と言って部屋をでるべく踵を返したが、

「少し厚着で、吸入気を忘れないようにね、急激に体が冷えちゃうと病氣によくないから」

と、言って部屋を出ていく、恭介は真剣な表情でうなずいた。

食器を洗い終えて、手を拭っていると風呂から出た真紀が寝間着姿でバスタオルを片手に椿の隣に並んだ。

「家政婦さん今日は泊まる？」

椿は真紀の乾ききつてない髪を見て、

「土日ならともかく　って、あたし何いってんだろ」

「家族の人心配するよね」

「別にあたしのことなんて心配しないわよ」

真紀は首を傾げ（？）

「髪の毛をびしょびしょ」

「いいや、自然に乾くし」

「風邪ひくわよ」

と、椿は言って真紀を浴室に連れて行った。

ドライヤーを当てながら、鏡越しに映る自分と真紀を見て、惨めな気持ちになった。

スタイルいいし美人だし……あたしなんてチビだし可愛くないし

……椿はどこをどうとつても真紀に叶わないと感じた。

「椿ちゃんって可愛いね。わたしがむこうで会ってたら、きっと飼ってる」

椿は赤面し、

「あたしなんて可愛くない。飼うって動物じゃないのよ!」

クスクスと笑う真紀。

「ね。わたしの友達になってくれる? 外にも出られないし、椿ちゃんが話し相手になってくれば気も紛れると思うの」

「話し相手くらいなら……。ね、これからどうするつもり?」

椿はドライヤーのスイッチを切って言った。

「今はまだ何も考えられないかな」

「そか」

椿はドライヤーを片付けて浴室を出る。

真紀も後に続く、そしてリビングに続く扉を開ける前に、椿の小さな体を振り向かせる。

「ちよつと何よ」

「真紀もバンド参加していい?」

椿は驚いている。

「それってバンドのメンバーになりたいってこと?」

「リハビリもかねて参加したいの」

椿は考え込んでいる。

「楽器は何ができるの?」

「キーボードはできるかな、あとヴォーカルも少々」

「少々って……」

「隆君や椿ちゃんにはごまかせいでしょ、わたしは歌が好きだった

けど、スカウトは顔だったしね」

「でも、頑張ってると思う。S A Y Aを聴いてる限り、趣味も悪くはないし、アルバムにあるカヴァー曲のアレンジもとてもいいし」
「でも、隆君が反対するかも」

「隆が反対しても、リーダーはあたしなんだから、そうね……期間限定なら悪くないかもしれない」

椿がそう言うのと、真紀は椿を抱きしめ喜んだ。

「ありがとう！」

「ちよつと真紀さん」

「その真紀さんってやめて、真紀でいい」

「真紀、やめて骨が折れる」

そのとき扉が開いて、隆が現れた。

隆は二人の姿を見て、

「おまえら、何やってんだよ！」

と、言った。

「真紀が急に　いいから離れて！」

「隆君わたしもバンドに参加することになったからね」

「また、勝手に決めやがって！」

「リーダーはあたし、隆がそう決めたでしょう」

三人の声はフルハウスの下まで届いて、マスターはグラスを磨きながら、

「おや、今日は昔みたいに騒がしいね」

と、微笑して言った。

バンド始動！

なかえ川の橋を渡り、遊歩道を進んで、噴水公園を過ぎる。道路を挟んでしばらく歩くとフルハウスが見えてくる。

椿は身の丈に見合っていないギターを背負い、歩いていた。

フルハウスの裏手、駐車場から二階に上がると、その部屋の扉をセイウチのキーホルダーについた鍵で大事そうに扱い施錠を解除した。

左手にキッチン右手に浴室とトイレ　リビングへと続く扉を開ける。

奥までいって、ベランダに続くガラス戸のカーテンをパツと開く、早朝を知らせる光が部屋全体を包んだ。

椿はギターと鞆を置いた。

ベットから今にも落ちそうに真紀が床で布団を敷いている隆になだれかかっている。

椿は目を細め近づくとき真紀を壁際まで押しつけるようにして布団をかけ直した。

それから浴室まで向かうと洗濯機のスイッチを入れ、蓋を開け洗剤を適量落とすと洗濯機を回した。

隆は台所からトントンとまないたを叩いている音で目覚めると、まだ慣れていない環境を受け入れるように、しばらく固り辺りを見渡す。ベランダには洗濯物が干され風を受け衣服がなびいている。

椿はそんな隆を見つけると包丁を止めて隆の下まで向かって、

「隆、顔洗ってきたら」

と、言った。

「真紀のやつ昨日も三時に起こしやがって　まだ六時半かよ」

隆はブツブツと言っていたが起き上がる。

「もうすぐ朝食できるから」

「俺、朝はいらん」

「そんなこと言つてないで」

「朝からメシなんて気持ち悪くてくえん」

「隆 規則的な生活をしないと、風邪でも引いて喉いためたらどうするのよ」

「おまえ、いいから包丁を降ろせ」

椿は包丁を隆にビシッと突きつけていた。

それを慌てて降ろす。

椿もこの環境に浮かれているのだろう。

「規則的つてな、それをこいつに言つてやつてくれ」

隆は真紀の方に顔を向けて言った。

「でも、真紀は特別、そもそもあたしを雇うわけがそれなんだから」
「またおれだけのけものかよ」

隆はそう言い残すと浴室に向かった。

顔を洗つて隆はリビングに戻る。

テレビをつけると、アップでSAYAが映っていた。

「事務所側からは未だに公式な発表は出ていません。やはり失踪と
いうことなのでしょうかね」

「事務所側もSAYAさんの居場所がつかめていないんじゃないで
すかね」

と、場面が切り替わり三人のゲストたちを映した。

「SAYAさん！ この番組見てませんか？ 皆さん困ってますよ
！」

と、金髪の外国人コメンテーターが手を振りながら面白おかしく
言っている。

「SAYAならここで爆睡してるぞ」

隆は笑いながら言った。

しばらくテレビを見ていたが、真紀がモゾモゾとまるで糞虫のよ
うに布団から這い出してきたので隆はテレビを消した。

「ちよっと待ってうるさいよ」

「何を待つんだよ」

隆はそう言いながらハンガーに掛かっている制服を取って浴室に向かった。

隆が着替えを終えてリビングに戻る頃には朝食もテーブルに並んでいた。

冷蔵庫の上には弁当箱が蓋を斜めに建てかけ三つ並び湯気を立てている。

真紀は椿に起こされ時折、目がつぶれそうになっている。

椿がご飯をよそって朝食が始まった。

「いただきます」

「いただきます……ます」

「召し上がれ」

隆は味噌汁を飲んで、

「うめー」

と、言った。

一般的な和食である。

「起きる時間が遅いから朝食が食べられなかったのよ、いつもぎりなんだから」

「かもな、って、真紀食べながら寝るな」

「これから毎日こうやって三人で朝食ね、お弁当も真紀の分、作ってあるわよ」

「真紀は完全に夜型だからな、少しは生活改善しろ」

「眠い……」

そうして朝食も終わり、皆それぞれ残さず食べ上げていた。

椿はこうした自炊や洗濯を日常的に行っていたが、それはあくまで自分一人のためであった。

「ごちそうさまあ」

「美味しかった、これなら毎朝食べられる」

「お粗末様」

一人で作って食べるよりも美味しい。

椿はそう思った。

食器を片付けて洗い終わるころには真紀はベットに手を掛けて眠りについてた。

隆と椿は浴室の洗面台に並んで歯を磨いている。

「皮肉なものだな、こんな形であるときの約束が半分くらい果たされるなんてな」

「あたしがここで暮らすようになれば半分じゃなくなるわよ」

「でも、それはできない、だろ？」

「うん……」

「不思議だな」

隆は歯磨きを終えて出る。

椿も歯磨きを終えて後に続く。

三つのコップに色違いの歯ブラシが並んでいた。

二人が用意を終えて玄関から出ようとしていると、寝惚けた真紀が這うように起きてきて、言った。

「二人ともいつてらっしゃい」

「いつてきます」

「お弁当は冷蔵庫の上に置いてあるわよ」

真紀は二人が出て行くとき一瞬寂しそうにしたが、玄関が閉まるとベットに戻り眠りについた。

待ち合わせの場所まで肩を並べて隆と椿は歩いた。

自転車通学生、徒歩通学生、バス通学生が生徒用玄関に続くこの交差点で交わる。

恭介と良太は松尾を見つけると挨拶を交わし自転車を止めた。

「おはようございます」

「お、おはようございます」

「おう、おはよう。丁度いいおまえらも一緒に行こうぜ」

と、言っていると隆たちも丁度合流する。

それぞれ挨拶をすると校門に向けて歩き出した。

松尾が先頭に歩いてその後ろに、椿と隆、その後ろに良太と恭介が自転車を押して続いている。

「しかし昨日は大変だったな」

松尾は振り返り隆の顔を見て言った。

「おまえ途中で逃げただろ」

「おれさまの仕事はバンドの裏方だからな、見てる方が楽しいんだ」
「マツちゃんには本当にお世話に……あたしなんて言ったらいいのか」

「おれさまは、隆のファンなんだ。こいつの歌が聴けるのなら安いもんだ」

「おもえばクリスマスライブ、あれは松尾の工作だったんだな」

「何のことだか」

「僕と恭ちゃんあの日公民館に行かなければ、バンドをしようなんておもいつかなかったかも」

恭介もコクリとうなずいている。

「良太が頑張つて隆を誘ってくれたから今があるんだ。ま、他の要因もありそうだが」

と、松尾はニヤリと笑つて隆を見る。

「みんな、メンバーがまた一人増えたからね」

「えっ誰ですか、椿さん？」

「それは、後のお楽しみということだ」

校門が見えてきたので、良太と恭介は、

「それじゃ僕たち自転車置いて来ますのでここで」

良太は手を挙げて隆たちと別れた。

恭介は軽くうなずく。

「それにしてもS A Y Aと同棲してるなんてな」

「ちよつと声が大きいわよ」

隆が松尾の頭を叩く。

「おれが兄貴に頼んでヴォーカルを脅してなければ、S A Y Aと隆の出会いもなかったわけだ」

松尾は靴箱から上履きを取りながら小声で言った。

「おまえな、脅したのかよ」

「初めからお膳立てするとおまえは来ないだろう」

「そりゃそうだ」

「真紀の件は解決したわよ……とりあえずね……」

三人は上履きに履き替え教室に向かった。

良太は恭介が駐輪場から動かないのでため息をついて一人教室へと向かった。

良太が上履きに履き替え階段を上っていると、同じクラスで隣の席の津田美咲が、階段を足早に駆け上がって行った。美咲は良太に気付くと踊り場で良太を待って、

「おはよう良太君」

と声をかけた。

「おはよう津田さん」

良太もたどたどしくはあるが挨拶を返す。

「コート似合っているよ」

良太は津田の助言を聞いてから恭介と一緒にフリーモールへと出かけて、レディース物のコートを購入していたのだ。

それを今日着ていたのだが、内心誰かに褒めて貰いたかったのだろっ。

「ありがとう津田さん」

と、満面の笑みで答えた。

津田の表情は朱がさして、

「でも、油断はダメだよ、オシャレは清潔さが命だから日々の努力！」

そう言つて、津田は携帯電話を出してカメラ機能呼び出し、撮影をした。

「ちよつといきなり撮るなんて」

「ね、それより一緒に教室まで行きましょっ」

良太はうなずいて、二人は歩き出した。

恭介は二人の仲に入っていけず、じっと眺めていた。

良太君はどんどん変わっていつてしまう　そんなことを考えていた。

ふと休日フリーモールでショッピングをしていたときのことを思い出す。

良太は女性店員に赤面しながらも、自分の置かれている状況などを説明し、最終的にコートを購入するころには女性店員とも仲良くなっていた。

恭介は試着を終える良太を見る度に、突き放されていくような気分を味わった。

良太君だから隆君を説得することができたんだ。

恭介は邪念を振り払い教室に向かった。

（今は考えるな恭介、みんなについていくだけでも必死なんだ）

午前の授業も終わりA組に集まり弁当を食べている。

良太と恭介が昼休みこの教室で弁当を食べるという行為は、A組にも異物としてではなく風景の一部として受け入れられたようだ。今では奇異の視線も少ない。

隆と椿はクラスからも浮いていたが、それは話す内容が合わないというだけで、他の者からみれば音楽の才があると一目置かれてることなのだ。

松尾はオタクという偏見は存在していても巧みな対人関係で、クラスにとけこんでいた。

「おい、椿と隆の弁当のおかず、同じじゃないか？」

「それはそうよ、あたしが作ってるんだから」

「変な誤解するなよ松尾、こいつはバイトでやってんだ」

「どういうことだ？」

椿は一連の説明を終えると、

「芸能人ってすごいんですね、何だか」

良太が目を輝かせて言った。

「あいつは別だろ、ただの居候」

「真紀が聞いたら怒るわよ」

「でも今では最も、顔が売れてる歌手だな」

「まあな、これからですつてときに、あれだからな、アリエネエ」

「どうして逃げたんですか？」

「さあな……あいつ自身がよくわかってないことを、おれが答えられるわけがねえ」

「僕たちにもできることがあつたら言ってください」

「今日も練習のときには顔を出すだろう」

「おれ様も練習に付き合うとするか」

「何ていい加減なやつなんだ」

「隆に言われたくねえや」

昼食も終えて、椿はメンバーを見渡して言った。

「今日からは各自フルハウスに集合。いいわね？」

予鈴が丁度鳴ったので良太と恭介は教室へと戻っていった。

学校も終わってメンバーと松尾はスタジオに集まっている。

真紀は壁際にパイプ椅子を広げて腰掛けていた。

隆たちが帰ってくるのと、

「おかえりなさい」

と、言った。

「ただいま」

椿がそう答えると、真紀は、

「お弁当おいしかった、ありがとう」

と、言った。

「一応目覚めてたんだな」

隆が笑って言った。

恭介はドラムセットを慎重に避けながらドラムスローンに座った。その場所を基点として集まる。

「昨日はドタバタしてて、練習どころじゃなかったわね」

「その半分はおまえが原因」

「いきなり芸能人と同棲してるなんて聞いたら驚くわよ」

「あの……山中さん新しいメンバーの人まだきてないんですか？」

「そうだったわね」

そこで振り返り真紀の方を向いて手招き。

真紀がやってくる。椿は横に並び、うなづく。

「このバンドのキーボード兼ヴォーカル担当の真紀です。よろしくおねがいします」

と、真紀は首を少しだけ傾けて言った。

「新メンバーってS A Y Aさんなんですか！」

「ま、永遠というわけにはいかないわね、期間限定、S A Y Aのリハビリも含めて、このバンドの利害に繋がると判断したわ」

「あの、僕ファンなんです。サインください」

「俺様にも」

「お、おれ……」

隆以外の男性陣は、S A Y Aに夢中である。

「おまえらな……どれだけミーハーなんだ、仮にもこれからバンドをするんだぞ、S A Y Aのファンでどうする」

隆はため息をついて言った。

「あたしたちのする音楽は大衆音楽よ、あなたの言いたいことも理解できる。あたしならね　でもそれだって方法論のひとつにすぎない。肯定しろとは言わないけど、もう少し柔らかい考えじゃないとだめよ」

「ホワイトアルバムの呪いを受けているか？」

真紀は無言でうなずいた。

ホワイトアルバムとは六十年代のロックバンドのアルバムのことだ、隆はロックの進歩はこのアルバムが世の中に出てから止まっているものと思っている。

それは椿にしても真紀にしても共感できることなのだろう。

隆はしばらく黙っていたが、

「俺が悪かった、話しの腰を折ったな」

「いいわよ、隆の苦悩はあたしの苦悩でもあるから……そうね新メンバーも迎えたことだし、改めて自己紹介といきましょうか」

椿がそう言うのと恭介は顔を強ばらせた。

「はい、はい。わたし、一番乗り」

真紀が手を挙げて言った。

「おまえな……さっき自己紹介終わっただろ」

そんな隆を無視して真紀は自己紹介を始めた。

「真紀です。今は隆君と椿ちゃんと一緒に暮らしています」

「あたしは違うじゃない、家にはきちんと帰ってるわよ」

「でも、土日は泊まってくれるよね？」

「別にいいけど……」

「キーボード担当です。わたしはSAYAだけど、みんなといるときは真紀です。だから真紀って呼んでくださいね、隆君とは」

「ながつ、次俺な」

隆が手を挙げる。

「おれの頭の中ではいつも音楽が流れてる。それが当たり前だ……最近はずりに振り回されっぱなしだ。だから言っておくぞ！ おまえらしい加減にしる！」

「根に持つ男は嫌われるぞ、俺様なんて次の日には大体のことは忘れてる」

「だから成績悪いんだろうが」

「じゃあ、次は僕が」

良太がおずおずと手を挙げる。

「羽柴良太十七歳、血液型はA型です。趣味はアニメやゲームです。恭ちゃんとは仲良しです」

「細かすぎるわよ」

「ここは学校じゃないぞ良太」

椿と隆がツツコミを入れると良太は赤面した。

「いいじゃない。ねえ良太君」

と、真紀が優しく声をかけて背中の手を置くと、ビクッと体を硬直させて、まるで茹でダコのようになった。

「かわいい」

「真紀、その辺にしてやれ、良太は最近高校デビューしたばかりだ。この前まで、オタクの鏡のようなやつだったからな」

「そうなんだ、ごめんね」

真紀が離れると良太は落ち着きを取り戻した。

「ベース担当です」

そこで、椿が手を挙げる。

「ギター担当の山中椿よ、このバンドのリーダーということになっているわ。隆とは親友」

「次は俺様だな」

「松尾はメンバーじゃないだろ！」

「俺様は松尾純一、自称アウトロー。隆の一番のファンであり、主にこのバンドの裏方を任されている」

「おい、おまえ誰に任されているんだよ」

「俺様が俺様に」

「でも、マツチャンがいなければ、隆と真紀は出会ってないわ」

「そうなの……えっと松尾君？」

真紀が松尾を見る。

松尾は恥ずかしそうに鼻をこすって、

「おれが隆をクリスマスライブで、歌わせるとい陰謀を企てたんです」

そこで真紀は合点がたって、

「涼子さんが言ってたことって、そのことだったんだ」

「隆、バイクはしばらく禁止だって言ってたぞ涼子さん」

と、松尾が言うと隆は、

「アリエネエどうしておまえが、涼子と連絡取り合ってるんだよ」

「俺様はあの人を師匠と思っている。何も問題はない」

「涼子の野郎！」

「はいはい、みんな静かに、恭介の自己紹介が終わってない」
リーダーの一声で場は静かになる。

恭介はドラムスローンから立ち上がり、拳を開いたり閉じたりしている。

顔は赤面し汗が滝のように流れた。

「恭ちゃんがんばって！」

良太がその声をかけると、恭介は震える声で言った。

「お、おれは橋本恭介……」

と、そこで声は途切れ恭介は下を向いた。

一秒二秒と無限のような時間が流れる。

「恭ちゃん」

「おまえは黙れ」

隆は良太の頭を軽く叩いた。

「ドラム担当で……良太君とはデコボココンビです。みんなには置いていかれないようにがんばります」

と、恭介が言い終わると、真紀が柔らかな顔をして言った。

「置いていく人なんていないよ、恭介君がそう思ってるだけ、ね？」
と、良太のときのように優しく背中の手を置いて言った。

椿は自己紹介が終わって、軽く息をついた。

そんな椿を見て真紀は不思議そうに言った。

「ねえこのバンドの名前はなあに？」

「……」

「俺様としたことが……」

「そう言われてみれば、決まってませんね……」

「リーダー！」

「困ったわね。バンドを組むことが難しすぎて大事なことを忘れていたわ……じゃあここは発起人、デコボココンビが決めなさい」

良太と恭介は顔を見合わせ首を振る。

「そんなあいきなり無理ですよ、山中さん」

真紀は首を傾けて思考していた。

頭の中は花畑が展開され、それはもうかわいらしい名前が浮かんで消えていたが、椿の一言で、ぴたりとはまってしまふ名前を思いついた。

「ねえみんなわたし、思うんだけど……そのままでもいいんじゃないかしら？」

「そのままってどういう意味だ？」

「凸凹バンド」

真紀がそう言った瞬間隆は顔を上げ椿を見て、松尾見て、良太を見て恭介を見て、

「ぴったり！ 響きも悪くないし、肩がこらない名前でもある」

「真紀！ あなた最高よ！」

「良太君僕たちも貢献できたね」

「凸凹かよ、ぴったりじゃねえか！ 俺様感動した」

椿は一人一人を見渡し、咳払いすると、

「凸凹バンド結成よ！」

と、手を高く高く掲げて言った。

老人バンド

半開きのシャッターの奥では、男たちが汚れた作業服を着て鉄筋の束を切断している。

鉄の錆びた臭いが漂う室内を、老人は威風堂々と肩で風を切るように歩く、裁断機の傍までいくと、

「ご苦労さん」

と、その男たちの中でも一際若い青年の肩に手を置いて言った。

「親方！ 来てたんですか」

青年は顔を上げて言った。

老人の名は宮下源二という、顔は皺が刻まれ、髪は丸坊主で白髪頭、太い眉が厳つい印象を与えている。鋭い目つきは人生の荒波に揉まれたことを表していた。

「わしは引退したって何度言った」

源二はそう言いながら台の上に、ジュースの入った袋をドサリと置いた。

「親方はいつまでたってもおれたちの親方ですよ」

男たちの中でも一番の年長者がそう言った。

「ありがとうございます」

男たちはバラバラな種類のジュースを、おもいおもいに手に取りプルタブを開ける。

首に巻いた手ぬぐいで汗を拭いている。

「おだてても何もでんぞ」

と、言って源二は鉄筋の束を一目見て、

「バカタンが、長さがくるつとるやろうが」

と、語気を荒くした。

「すみません！」

と、先ほど一番に声をかけられた若者が工場に響き渡るような声であやまった。

若者はそのまま走ろうとしたが、

「あとでええ、ほらなわしは文句言つたためにここにきちよるけん」

源二は蔑つい顔をゆるめた。

工場は笑いで包まれた。

暇をもてあました源二は古いテレビの電源をつけた。

テレビには芸能人が静止画像で映され、下にテロップが「消えた歌姫」とついている。

源二は見るなり、

「最近の若いもんは……こいつが地元出身なんぞ恥ずかしい。おまえらは仕事を放り出したりはせんなあ？」

「そんなことしたら親方に殺されますよ」

源二はそれを聞いて豪快に笑った。

池田ユキエは腰に手を当て手を振っている。

「あんちゃんまたきんさい」

「お母さんそれじゃあね、何かあったらすぐに電話して、来週またくるけん」

孫は助手席の窓から顔を出して、その後ろから娘が顔を覗かせている。

「おばあちゃんまたねえ」

孫と娘を乗せた軽自動車は道路に走り出た。

ユキエは顔も身長も手も小さい、おまけに腰が曲がっているのも更に小さく見える。

しかし、顔立ちは上品で髪も手入れされ、身につけている衣服もいやみを与えていないのでオシャレな老人に周りからは見えるだろう。

玄関を開けてゆつくりと廊下を歩く。リビングまで行くとカレンダーに目がいつて、数字に大きな赤のバツテンを見つけると、

「まあ」

電話機の傍までいつて呼吸を整えてからボタンを押していった。

目標は隆が選曲した洋楽のロックの曲を百回以上、ある程度のクオリティを持ってコピーができるまでやるということだった。

無論良太と恭介は素人なので、椿はそれも考慮していた。

ともかく基本的なことができるまで、良太と恭介は題材の曲をを繰り返し返すしかなかった。しかし一朝一夕でできるものでもなく、二人が置いていかれるのは仕方がないことだった。

ギターの早引きなど十代のころに努力を続け身につけなければ、一生できないと言われている。

隆と椿が凸凹バンドで異彩を放てるのも、物心ついたときより練習をしてきた結果だった。

椿は録音スタジオの区画に入ると、控えめな音で流れているコピー曲を止め、良太と恭介の下までいって、

「良太と恭介は個人練習に力を入れないと駄目ね。大丈夫ある程度のところまでは、いけるわよ」

「そのかわり、家でも夢にみるくらいは練習しろよ」

「はい！」

「恭介はシャドウでも」

「は、はい」

「二人とも頑張って、目標曲が演奏できるようになれば世界変わるからね」

と、真紀が言うつと椿はうなずいて、

「じゃあもう一度いつてみましょう。遅れてきてもいいから全体をつかんで、恭介は音が大きくなりすぎないようにして」

「ねえ椿、次はわたしがヴォーカルしてもいい？」

と、真紀は言っパイプ椅子から立ち上がった。

「いいわよ、隆はそこで監督して」

「号令はあたしが、声で判断して、ワン、ツー、スリー、フォーでいくわよ」

椿が号令をして演奏が始まった。

良太と恭介は顔を見合わせずについていけなくなるが、それは予想のうちで椿はそのまま演奏を続けた。

真紀の歌声はブランクを感じさせない程だったが隆の顔色はさえなかった。

曲も中盤に差し掛かる頃、スタジオのドアが開いた。

隆はそちらを見て手を挙げる。

マスターが手を挙げ返してくる。

しかしそのあとに続いた二人を見て隆は喜びの表情で迎えた。

三人はゆつくりと隆の近くまで行くと演奏を聞き入った。

真紀は全力で歌った。ドラム音もベース音もついてきていないが、椿のギターはそれだけ主旋律を底上げしてくれるのだ。

音はフェードアウトしていく、

真紀はマイクを持ったまま、

「どうだった？」

と、隆に言った。

するとそのとき、スタジオに怒声が響いた。

「下手くそが！」

「源さん……」

源二が真紀を睨み付けて怒鳴っているのだ。

ユキエはそれをたしなめようと細かい声で言った。

「おまえさんの歌には感情がとんとこもつとらん！ ただうまく歌おうとしているだけやろうが！」

隆は額に手を置いて、迷ったあげくに、

「歌声に特徴がない。声に演技力がない。と、まあ、言ったからには責任をとる。源さんユキエさんマスターいい？ おれコーラス入るわ」

マスターは状況を察してうなずいた。

「良太、恭介、真紀、場所を譲って」

椿がそう言うのと良太たちは楽器を置いて壁際まで行った。真紀が立ち尽くしていたので椿は手を添えるように誘導する。

マスターはドラムスローンに座る。源二はマイクを持つ、隆も隣でマイクを持つ、ユキエは少しだけ音を鳴らして首を傾げたが、コクリとうなずいた。

マスターがドラムスティックを叩き合わせ、それを合図に演奏が始まった。

源二の歌声は六十代とおもえないほど迫力があり、振動が伝わるほどだ。ユキエのベーステクニクはとても容姿から想像はしがたい、マスターに至っては超然としていた。

楽器の音は小さく歌声と調和が取れていた。

真紀は愕然とした。同じ曲でこれほどまでに違いが生まれるものと、これでは良太と恭介がたとえある一定の技術があったとしても、その差は歴然だ。

隆と椿に至っては老人バンドのテクニクの中でも個がまるで失われていない。

（何が違うの？ どうしてなの？）

今までバンドというものに遠ざかりすぎたということもある。自分の生み出した歌声は何トラックも重ねられていたし、舞というアーティストマネージャーのミキシングがあつてこそだった。でも

真紀は絶壁のような壁を目の前にしたような気分だった。それは絶望と呼べるものだ。「すごい……」

「すごいね、良太君」

良太と恭介は興奮も冷めやらない。

「懐かしい。あの日を思い出すわい」

「椿ちゃんの誕生日の日」

「ユキエさん……」

「老人バンド、最高！」

「真紀、気にしたらダメよ。源さんは根はとっても優しい人なんだからね」

「ワシはいい加減なやつはすかんけん」

「源さん、こわがられるやろう……やめよな」

ユキエは源さんの肩を優しく叩くと、源二は鼻を鳴らした。

真紀は弱い足取りで源二のもとまで行くと言った。

「お願いします！ わたしの先生になつてください！」

場が凍り付くような悲痛な声だった。

「真紀……」

椿は言った。

隆は沈黙を守っている。

「芸能人はお金さえかければ、レッスンなんて受けられだろう、それにワシがどうしておまえさんの稽古をつけにやならん？」

「あなたじゃないとダメなんです！ お願いします」

「駄目だ駄目だ」

源二は、ユキエの方を一度向いて、

「今日は楽しかった、マスターまたくるわい」

出口に向かう源二とユキエ。

「お願いします！」

真紀は見栄も外聞もかなぐり捨てて必死に言った。

「おまえみたいな性根のないやつに教えることはない。としよりだからつてなめとつたんやろうが！」

源二は扉の取つてに手をかけた。

真紀はそこまで走つて、土下座をした。

「お願いします。わたしに教えてください」

真紀のこの行動に一同は言葉を忘れたように静まりかえった。

「源さん、俺からもお願いする。SAYAを立ち直らせてほしい、こいつ夜中こっそり泣いてるんだ。自分でもどうしていいかわからないんだろ、でも、やることがわかつたんだよな？」

真紀は涙を流しながらうなずいた。

「わしは優しいことなんていえん」

「それでもいいです！」

「わしは遠回りなことしかできん」

「それでもいいです」

「そもそも表現力なんて身につけられる保証もない、タカ坊が説明できんように、歌唱力以前の問題じゃ」

「それでもやってみせます！」

「それならまず、どんなところにもブルースの神様がいると思え、物が落ちる音、自分の声、他人の声、練習なんていったって、どんな天才でも限られた時間しかできん。日常的に歌うという表現方法をみにつける、わかったか！」

「はい！」

「源さんがそう言うんやったらうちも、あんちゃん？」

と、良太の下までユキエは行って、にっこりと笑顔を作ると、

「よろしく願います、あんちゃん」

と、言った。

「バンドの方針も決まったわね、とりあえず、あたしと隆以外は、教えてくれる人の言うことまず第一に守るように！ それでは解散！」

と、椿が言って練習は終わりを告げた。

都内にある高級な佇まいの一角、小城舞は、今日も無人の部屋で主の帰りを待っていた。まるでそれは夜の窓辺に立つ深窓の令嬢である。

ふと窓硝子越しに携帯電話が光っているのが見えた。年中鳴っているのに音は消してあるのだ。

口元を歪め液晶ディスプレイを確認すると「公衆電話」という表示になっていた。

一瞬出るまいかと躊躇をしたが電話を取った。

「はい、もしもし」

疲れた声はだだもれで相手にも伝わっているだろう。しばらくしても返答はない。

「もしもし？」

舞はもう一度繰り返してから、電話を耳に当て直した。

「真紀さんですか！」

「舞ちゃん……舞ちゃん……」

真紀は電話越しに泣いている。声は震え弱々しい。

「わたしとんでもないことしちゃった」

舞は瞳を閉じる。

「それはそうでしょう、あたりまえでしょう」

「ごめんね……ごめんね……」

「今頃気付いたんですか、反応がいつも遅いんですから」

舞は涙が出るのを唇を噛みしめこらえた。

「でもね、やっとだけど、どうすればいいのか、これからどこに向かつて行けばいいのかわかったのかもしれない」

「それでも漠然としてるんですね」

「でも、すぐくつらいの、真紀苦しいの……」

「はい」

「でも、真紀頑張れるとおもってから……ごめんねもう少しだけ待って」

舞は真紀が電話を切るのではないかと慌てて、

「真紀さんどこで何をしてるんですか？」

「隆君と同棲してるの」

「ちよっと待ってください……あのときの少年ですよね」

「うん……」

「不味いですよ、記者たちがそんなスキャンダルをつかんだりしたら」

「大丈夫だと思う、ごめんねまた電話するから」

舞は何度も呼びかけたが、電話は切れていた。

しかし、気分は前より落ち着いていた。どこで何をしてるかということがわかったからだ。それは真紀が無事だという証拠なのだから……。

そうして夜は深く深く落ちてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7681z/>

ウレハ

2012年1月14日19時48分発行